WASON
HQ

July 1895
No. 412

明治十八年初刊

女學雜誌

每月廿五日發兌

第四百拾貳號

要目

社說　來るべき一大事、一大時節

評論　神智靈覺の友に叫ぶ　教界評論の道　國家主義、世界主義　日本宗教を歡迎す

女學　女子教育十年後の化粧　女子徒弟學校　時これ諦命の說　家に歸る女學生　近時の女子教育論（櫻井鷗村）

隨感　吾にはゆるせ◎理想を美として誇るものあり◎名歷史及び聖經の句◎戰時武士の病◎圓朝子の槍道◎遠離近思の情

新刊書　◎救急看護法◎普通看病學◎家庭理財◎征淸詩集◎明淸盛衰史◎日用百科全書◎殉國佳談◎戰事大探偵◎日淸戰爭繪卷七卷◎衣笠城◎半月城◎文藝俱樂部◎不言不語◎商業資料

爛煥　磯の上風（俳句一百六十五首）　櫻　楕　子

片々　◎憂國の婦人來つて訴ふ◎女子傳道論◎外人が誤解の一例（客舍の仲居を藝者と認たむ）◎日本の婦人決して男子に劣らず（吳大五郎氏の說を駁す）◎東洋の二女傑◎卒業女學生一覽（二）◎京濱婦人大祈禱會の由來◎裁縫及家事試驗問題◎同志社女學校會計◎監督教派の諸婦人會◎朝鮮釜山通信◎日本女子体格一覽表◎醫鐙◎神戶婦人報公會◎速記者佃氏◎女子師範學校の養蠶◎高等女學校設立の議◎大坂の特色◎高田耕安氏の看護法講演◎房總の女中に貯蓄心多し

明治二十八年七月二十五日發兌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1104
...

July 1895
No. 412

明治十八年初刊

女學雜誌

每月廿五日發兌

第四百拾貳號

要目

社說
來るべき一大事、一大時節

評論
神智靈覺の友に叫ぶ
教界評論の道
國家主義、世界主義
日本宗教を歡迎す

女學
女子教育十年後の化粧
女子徒弟學校
時これ讓命の說
家に歸る女學生
近時の女子教育論（櫻井鷗村）

隨感
吾にはゆるせ◎理想を美さして誇るものあり◎名歷史及び聖經の句◎戰時武士の病◎圓朝子の槍道◎遠離近思の情

新刊書
◎救急看護法◎普通看病學◎家庭理財◎征淸詩集◎明淸盛衰史◎日用百科全書◎殉國佳談◎戰事大探偵◎日淸戰爭繪卷七卷◎衣笠城◎半月城◎文藝俱樂部◎不言不語◎商業資料

爛煥
磯の上風（俳句一百六十五首） 櫻 楕 子

片々
◎憂國の婦人來つて訴ふ◎女子傳道論◎外人が誤解の一例（客舍の仲居を藝者と認たむ）◎日本の婦人決して男子に劣らず（吳大五郎氏の說を駁す）◎東洋の二女傑◎卒業女學生一覽（二）◎京濱婦人大祈禱會の由來◎裁縫及家事試驗問題◎同志社女學校會計◎監督教派の諸婦人會◎朝鮮釜山通信◎日本女子体格一覽表◎醫鐙◎神戸婦人報公會◎速記者佃氏◎女子師範學校の養蠶◎高等女學校設立の議◎大坂の特色◎高田耕安氏の看護法講演◎房總の女中に貯蓄心多し

明治二十八年七月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

再版 記憶術

●實地應用ニ喝采ヲ博シタル和歌山縣人太田葉氏ノ著也當分實價拾四錢（郵劵不苦）ニテ配布ス●定價廿錢

申込所　大阪天滿旭町十四番邸　山口天民堂

殉國豫後備兵憫れむ可き遺族扶助義捐者廣告（一）

金壹圓　立見美濃子

金二十錢　牛込南榎町中村正子

金五十錢　市ヶ谷甲良町卅四番地三田松子

第四百拾貳號目次

社説
來るべき一大事、一大時節

評論
神智凝聚の友に叫ぶ
教界評論の道
國家主義、世界主義
日本宗教を歡迎す

女學
女子教育十年後の化粧
女子徒弟學校
時これ壽命の說
家に歸る女學生
近時の女子教育論（櫻井鷗村）

隨感
昔にはゆるせ◎理想を美として誇るものあり◎名、歷史及び聖經の句◎戰時武士の病◎圓朝子◎の槍道◎遠離近思の情

新刊書
◎救急看護法◎普通看病學◎家庭理財◎征清詩集◎明治盛衰史◎日用百科全書◎殉國佳談戰事大探偵◎日清戰爭繪卷七卷◎衣笠城◎半月城◎文藝俱樂部◎不言不語◎商業資料

爛煥
磯の上風（俳句一百六十五首）　櫻精子

片々
◎愛國の婦人來つて訴ふ◎女子傳道論◎外人が誤解の一例（客舍の仲居を藝者と認たむ）◎日本の婦人決して男子に劣らず（吳大五郎氏の說を駁す）◎東洋の二女傑◎卒業女學生一覽（二）◎京濱婦人大祈禱會の由來◎裁縫及家事試驗問題◎同志社女學校會計◎監督教派の諸婦人會◎朝鮮釜山通信◎日本女子體格一覽表◎神戸婦人報公會◎速記者佃氏◎女子師範學校の養蠶◎高等女學校設立の議◎大阪の特色◎高田耕安氏の看護法講演◎房總の女中に貯蓄心多し

前號目次

社説
宗教的東方問題

女學
女子教育大勢の實跡
女生普通教育
職業教育、職業的教育

評論
無意識論
望月圭吉君
國家教育の名に惑ふ

隨感
血性論理○あやしき看護○義捐○古風の家屋

爛煥
博士ノースロップ先生　中村茂策
星夜　森愛軒
山水の影　流水庵
出立。山の朝。山中。巨岩。うぐひす。
散る花。山翁。山路夕陽。山寺。
美觀廢娼論　花影子
朝鮮の官妓　齋藤音作

片々
貴婦人の義捐金募集○第三回女子夏季學校○埼玉縣公娼新設問題○朝鮮婦人最初の留學生○保姆講習所設置計畫○高等女學校設立の議○女子高等師範學校○函館婦人矯風會○長崎保姆教育會所○萬國婦人禁酒會總會○山口縣の女教師○紅情綠意○阿嬌相公○伯林結婚時期○二女の文（女劍舞）看護美談○教育大會に於る女學○農間女子の教育○沖繩の婚姻○有儔婦人募集文

孤女學院特別資本募集廣告

孤女學院成立の主旨は尋常孤兒院と異なり純然女子教育の精神によりて發起建設せられたる者也。茲に創業三年の星霜を經て教育學上の進歩なみなみならず、最上級生徒の學力感ずるに足るものあり。然るに該院生計の維持は單に仁人隨時の義捐金による之を用ゐて教育上の費用に供ふ可き餘裕あらざるに付、此上一層教育上の整備を求めんに其便りを得ずとて院長は太たく心を痛めらるる由に聞けり。加之目今孤女の最長年者は既に十四歲に達せり其前途身を處するの道も亦た今に於て講ぜざる可らず。故に吾等同念の族、申合せて發起人となり、茲に天下の同志に計り、孤女學院の女子教育並に孤女立身の二つの事の爲に、院外の特別經濟として資金供給の方を與へられんとを祈る。之が爲めに定むる所の震法如左。

一　茲に孤女學院の女學及孤女立身の二事の爲に殊に資金を募集し此資金を名けて孤女學院特別資本と云ふ。

二　此資本は院兒が從事すべき尤とも安固なる事業（最初は養蠶）に放資し其收益を積んで募集の主旨たる二事に限りて使用するものとす。

三　此資金及び其收益は孤女學院尋常の生計費に使用するとを許さず。

四　收益の二分五厘を以て孤女の貸銀とし殘り五分を女學に、同二分五厘を立身費に充つべし。

巖本善治　石井ちか
小鹿島筆　加藤とし
田村武治　津田むめ
名出保太郎　小島きよ
古在とよ　青木まさ
平野はま　杉浦義道

右義捐金取次所　東京瀧野川村　孤女學院

女學雜誌

第四百拾貳號

明治二十八年
七月二十五日發兌

社說

來るべき一大事、一大時節

遠からぬうちに大事あるべしとは、かねて待構えながら、俄然、勃然として、韓山に風雲動きてより、斯迄に迅速ならんとは想ひ設けざりしと歎きし人、蓋し鮮なからむ。

定めなきは、人世の常なり。之を、一家、一身の小さきに考ふるも、尙ほ斯の如し。況んや、之を大にして、事の邦家、列國に關わるものに至りては、人意をもて向え測らんこと、殆んど難し。但だ、達人ありて、其の大勢に通じ、凡そ其の大躰を揣摩して、傾趣のあらましを察知することはありとも、抑そも、此の大勢の何如にして來り、何處より起り、何如なる年月に顯われ初めんかの細情に及んでは、殆んど想像の外にありと謂はざる可らず。

此をもて、社會に事を待つものは、寸刻の油斷あることを許さず。失敗の刹那に新希望を建設することの必要なると共に、勝利の刻下、直ちに守成防禦の用心なかる可らず。家康が、「油斷大敵」の四字を心頭の戒となせるも、近頃ろ喧傳せらるる、鐵血翁が自白＝一生十數分の安樂の外なかりし云々と言ふも、要とする所は、即はち此處ろ也。

損益に敏なるは、商人を第一とし、勝敗に銳どきは、軍人を第一とす。彼等が、機に先んじ、時に後れじとする覺悟は、殊勝なるものにて、之あることの優劣多少によつて、則はち、其の仲間の先後を決する也。イザと言はゞ、深夜なりとも、直ちに發足す。即はち、明日を待たざるの覺悟こそ、其の心得なれ。既に利して、富めば彌よ其富を惜しみ、既に勝て、地を獲れば直ちに守備隊を布く。ましてや、一敗、利に損し、軍に負けたることのあらんには、善後の工夫、更らに數倍の慘憺を加ふ。斯わりてこそ、「戰」の趣意を知れりとは言ふべきなれ。

然るに、世に臨んで戰ふものは、單に、商人軍族に限るべからず。苟くも、活如として社會に立つもの、孰れか、戰氣なくして可なるべきや。義を貫ぬくものは、邪と戰かはざる可らず、理を擴ろむるものは、愚と戰かはざる可らず、國を興さんとするものは、あらゆる妨害と戰かはざる可らず。既に戰かはゞ、敗らざる可らず、勝たざる可らず、獲ざる可らず、收めざる可らず。そも〳〵、何の寸刻か、放念痴如としてノロ〳〵すべき間隙かあるべき。

一身一家の事すでに斯の如し、邦家、列國に關するの事に至つては、更に尙ほ甚しからずや。邦家、列國の事、其の積極の運に際會するときも亦斯の如し、之を況んや、其の消極の否運に屬するの大痛悲時に於てをや。人々、安くんぞ安閑たるを得べけん。

同胞、皆な近日の事に恨みあり。即はち言はく、臥薪嘗膽と、吾等悉とく此の感慨あらんは、當然の道とす。左れど、嘗膽臥薪と云ひて、實行の覺悟に緩漫なる所ろあり、イザ、イザと言ひつゝ、一日にても然益に過ごすとあらば、殷鑑は遠きにあらず、近日の痛恨を直ちに復た再演するとあらんは、必せり。

何人にても、久しからずして『第二の大戰』あるべしとは、想像す。否な、想像するのみにはあらず、待ち構ふる所ろある也。夫れ、既に待構ふる所あらば、用心、經營、覺悟、準備の工夫、一日も油斷ある可らず。而して、一日の猶豫をも延引するとある可らざる也。『五年の後』と思ふあらば、忽然として、三年の后に事起り、『三年の後』と思ふあらば、俄然として、今明年の内にも事起るならん。これ、人事の常、取わけ世界を相手とする時の常態也。去年、勃然として、大事件の生ぜしとき感慨する所ろあり、ことし近日の痛恨ありて亦た感激する所ろありけんものは、必らずや必らずや、其の慨激を再たびするの無用意に陷いると勿れ。

日本武士の趣味を樂しむものは、かの「鉢ノ木」を讀め。貧中、風流を遺し、風流を客の爲めに犧牲にするの廉潔は更にも言はず、破れたりとも甲冑一領、瘠せたりとも馬一疋、スワ鎌倉に事ありと聞かんとき、第一に馳せ參ぜんの覺悟、用意は、嚴然として在り。即はち、是れ、武夫、國難に赴むくの準備にはあらずや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

嗚呼、方今の武士道は、各箇の職責によりて形を變ず。其の要粹は、責任を重んずるにあり。商人は、即はち利し、軍人は、即はち練り、學者は、即はち究め、敎育者は、即はち敎え、內君主婦は、即はち、事ある時、內に顧みるとを要せざらしむ。各箇、各別の狀態ありと言ふと雖ども、其の精神は同じ。烈告す、同胞四千万。冀はくは、相約して、一大事の爲に覺悟し、相ひ激して、一大事の爲に準備し、之より以後臥薪嘗膽の實行を嚴びしくし、遠からずして來るべき緊要の時機、乃ち同もに共に起たんとするとを盟はん。

評論

神智靈覺の友に叫ぶ

理解は必竟、成立後の講釋に過ぎず、之を成立せしむるものは、理解にはあらざる也。名文ありて、而して後ち文法あり、事例ありて、而して後ち科學あり、俊傑あつて、而して後ち敎育あり。學者、鷹揚として得意に理解し、例を千古に求め、事を万邦に較べて、甚だしく識聞の博ろきとを誇ると云ふと雖ども、詮ずる所ろ、到底、記錄、編纂、分類、歸納、覺束なき演繹類推の匹ひに過ぎず。皆な是れ事後の講釋にはあらずや。

學問の能事、何ぞこそ。單に、理解にありとせば、別けて甚ふべき程の者に非ず。人、八面玲瓏の智性を存し、天地呑吐の量識を賦せられながら、生きて成す所ろの事、即はち、事後の書錄に過ぎざる乎。斯の如くんば、其の成す有るが如く見えしものも、一に成すとあらざりし也。渠が存在によつて、一つの新らしき事業を加えず、渠が發見によつて、一つの新らしき深理を聞かず。營々として生き、孜々として學び、忙々として動けるもの、遂に草の萠え出づるが如く、水の巖を穿つが如く、流れの葦の踊るが如きに止まらば、恨意、それ何如んかして慰さめん。

甚だしき哉、『神智靈覺』の重んぜられざるとや。學者は之を愚かなりとし、才人は之を迷へりとし、所云る文明の徒は、之を痴なりとす。而して、其の據つて論駁する所ろの理由を聞けば、非道理なりと言ふに過ぎず。何故に、非道理なりとす

る乎と問へば、理解しがたきに由りて、と言ふに過ぎず。嗚呼、理解の名や、何如に魔力ある。好名辭！、余は其の人を惑わすことの多きを歎ず。

『神智靈覺』の質たる、理解せんとは難し。其物たる、傳えんとは難し。左れど、苦練深修の人士は、必らずや親驗すらし、尋常理解の圏外に、玉の如く、鏡の如く、劍の如き、一靈識のあるあつて存す。即はち、余れ自から辨ずべからず、余自から捕らふべからず、漠として而も明らかに、宏として而も鋭どく、冷として而も清らかなる、白雲の如く、劔光の如く、北氷のごとき、一神性の存するあつて座することを。嗚呼、吾、自から捉らふ可らず、何如にして之を人に授けん。言語に絶し、形容に越えて、而して、倘ほ津々として他に向つて化動することを覺ゆるは、其の靈能にあらすや。

試ろみに若し、其の長養し來る徑路を言わんか。即はち、愼獨を以て最初となす。愼獨の結ぶ所ろ、亮々として光明を來す。光明、來つて則はち別天地を觀る。玆に入つて端然として、神々しき聖壇に近づき、屢ば其の神韻を呼吸し、其の靈化に沐浴しつゝあれば、顧りみて、吾の既に前吾にあらざることを自覺す。驚ろきて、胸を撫すれば、胸に量あり。悦んで眺むれば、世界光々如たり。暗幕、左右に裂け、濃雲、地に落ち、心氣、爽快々として、靈知の鏡面の乍ちにして、輝やきを増したることを覺ゆ。此に於てか、映じ來たる所ろのもの、忽然として別色あり。理外の理、言外の語、非情の情、死中の活、躍如として起ち、自から其眞相を露はす。識悟徹底して、遺憾なけん。

試ろみに、世界の大勢を感得し、國家の通運を卜識し、一見、人を看取し、刻下疑題に直覺するの類ひに於て、今の所云る學者に何如んかして之を知るかと問へ。彼等は、文明流の方式を以て答へん。然り、材料、比較、調査、分類、類推のたぐひ、固より効あり。左れど、分析考究の達する所ろは、自づから限りあり、別に、綜合直覺して、優に天來の神韻に感通するにあらずんば、人智は久しからずして餓えん。

蓋し、人は老ゆるに隨ひて壯んなるを常とす。啻に、壯んなるのみならず、彌よ若やぐを以て常とす。其の然らざる所以のものは、『神智靈覺』の感通なきが故也。擾々煩々として、事務に齷齪し、忙中に閑あり、俗中に聖あるの消息に闇れず

只管ら世事に困倒し去らんとするによつて、前額の皺、いよ〳〵明らかに、氣力彌よ枯れ、精神、肉に先だちて死するに至る、悲しひ哉。かの道士が日に月に健康を加ふる所以のもの、豈に他あらんや。不老不死の藥は、思慮の中にあり。仙術の工夫、必らずしも得可らざるに非ず。

夫れ得道の君子は、活智活才あり。「神智靈覺」の人、豈に方外の仙士たるのみならんや。之を俗事に用ふれば即はち俗事に堪能に、之に道を談ずれば即はち幽玄深邃に、之を戰ひに役すれば人を斬る草の如く、之と情を開けば眞心の滴たるが如き、即はち其一班なり。故に、小智之を許すれば、隱險なりとし、佳人之と語れば戀人の如く、法士之と交われば迷信に類するが如き、即はち、其外形也。渠は、尋常に於ける、奇怪の疑問、世話に於ける不思議の偏屈ならん。達士、初めて達士を識るべし、其の本領を知らんことは、容易すきことにあらず。

我有微妙法　世間甚希有　衆生受持者　皆與願滿足
我行順世法　世示希有事　壽命悉長遠　福祿自還至

教界評論の道

宗敎界近時の批判の警語は、一に、正統不正統なり。二に、信不信なり。三に、自由非自由なり。

彼の自由派が、他の異派の人を難ずるや、常に「自由」を以て、自己獨得の洪量卓識の如く言ひ做し、局促を脱し、執迷を離れ、眞に能く敎養の進歩せる要理を味わひ得るものは、他に存することなしと斷定する也。夫れ、何如なるが、自由にして、將た何如なるが非自由なるかは、大ひに研究すべきことなれども、抑も早く自己を以て自由を味わひ得るものと判定し、他を以て否らざるものと議斷するは、元來「自由」の主旨に適せりや。斷定は、尙ほ可なり。斷定と共に待遇を定め、獨り自己が認ためたると同樣の事を認たむるもの耳を以て、初めて能く宗敎を味わひ得たるものと種別するに至りては、非自由も亦た太甚しからずや。

信不信、正統不正統の別を立てゝ、切りに他を裁斷するものも亦た此に類す。稍ともすれば、直ちに判すらく、彼は信仰薄らぎたり、又曰く、彼は不正統なりと。而して、何により

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、信仰の薄らぎたるとを知れりやと言わば、詮ずる所ろ、信仰の告白と標證とを吾と同じき狀態に於てせざるが故と答ふるの外なし。又、何によつて、正統不正統を判するやと問へば、均しく亦た、吾が最とも手堅しと信ずる所の教義を信ずるを以て正統とし、否らざるものを不正統とすと答ふるの外なし。

彼の自由派が、教義僻を打破せんとするは、一應、聞こえたれども、之を打破せんとするの餘り、即はち之に僻し、教義を破して、而して、「教義を破するとを主旨とするの或物」を代へて建設するの態あり。抑そも、教義を餘り切要なりとせずば、即はち之を切要なりとせずして放任するを以て足とせずや。之を放任して、重んずるものには、重んぜしめ、輕んずるものには、輕んぜしむ。此れ即はち切要なりとせざるの道にあらずや。然るに、之を切要とせずとし乍ら、之を打破するを切要とし、乃はち、其打破に專らにして、他に緊要の事あるを放擲するが如きは、何事ぞ。

又、彼の、正統派、信仰派なるものに至ては、自判獨斷して自から「正統」、「熱信」の標準を定め置き、一々他を批判して、自作の權衡に掛けんとす。其言ふ所ろを聞けば、最大切要の教義、此外になしと言ひ、最大熱信の標證は、即はち自己の如くなるとのみと言ふ。而して、彼等自身も、時としては、他より不正統なり、不信仰なりと非らるるとありて、其時に於ては、大ひに他の狹隘を嘲けり、獨斷の批判を慣ふりつつも、現に自己も亦た其過ちに陷いれるとを自覺せず、人は、眞とに身勝手のもの也。

夫れ、德教の事は、獨斷に流るるを免かる可らず。折衷は、公平の如くして、遂に些との實効なきと多し。如何なる、德教家と雖ども、古來、其の大ひに叫び、大ひに教えたるものを見れば、獨斷に流れざるもの殆んど稀なり。もし初めより獨斷なりと自覺し、既に僻せりと初めより意識して、而して能く「大」なるものは、未曾てあらずと雖とも、其行跡に付きて之を判すれば、則はち皆な此弊を免かるる能はず。これ熱誠漢に普ねく通ずるの殊色となす。獨斷、豈に必らずしも非とすべけんや。

左れど、獨斷、偏僻に陷いり易きほどの、德教家は、其叫ぶ所に於て、何如にも熱誠に、其主張する所に於て、何如にも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

堅固なるべし。而して、其口に述ぶる所の殊特の教義は、必らずや、身を以て躰し、行を以て任ずる所ろの教義にして、乃はち、其血たり、肉たらずんばある可らず。單に、文學上の趣味に養はれ、若くは氣質の偏好に因緣して、只だ唯だ、講話文筆の上に於てのみ「我說」「我感」を主張せんとするが如くんば、德敎上の價値を判する最后の標準に照らしては、其の極めて陋劣なることを見るべし。

所云る、自由、正統、信仰の諸派、もし之を論議の上に於て相ひ比較するときは、甚しき懸隔あり、和しがたきの相異ありと雖ども、德敎上實地の躰、生ける眞價値あるの實際に於て之を比較し來れば、左して相ひ違ふものなきを見る。

蓋し、名は實の賓なり。名によつて、相爭ひ、名に於ひて、品等を格するとも、直ちに其實を鑑みずんば、常に不測の誤謬あらんとす。世間、法政の類の事はイザ知らず、專ぱら、實際を要とするの德敎に關し、特には、神と人との交際に於て直ちに其間だに定まるべき、信不信などの品定を、人意を以て隨意に裁判し、讀書上の智識などを用ひて、與人の秘衷を輕斷し去らんとするは、小文士の好んで爲す所ろにして、「道」を味はふものの決して爲さゞる所ろ也。

惟ふに、論理の基礎は、人の好尙氣質によつて決す。又、解悟徹底の淺深厚薄は、人物の大小高下に關す。人苟くも、鍛錬して、氣質を温和純潔にし、好尙を多方公大にし、能く物の精髓に徹し、就中「道」の神韻を探味し、實地に「吾人品」を高雅にするの工夫に辛苦せざるものは、他の善所、美所を解認することの極めて遲鈍なるもの也。常に、物の消極に着眼し有形の失敗に苦慮し、只管欺かれじと心配して、斷えず、疑察邪推するものは、一分の批評家としては、其才を煥發し、多少の注意を惹きて、世に幾分の益を爲さゞるにはあらねど、遂に以て、大義を決し、大事を斷ずるの資格なきもの也。今や宗敎界、批評の聲に滿てり。現に其聲を放つもの、及び、其聲に聞くもの、共に大いに反省し、元來、已を得ずして、批評なるもの〻起生せる本原を覺悟して、其間、勉めて大道の修養を忘却することある可らざる也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

國家主義、世界主義

教育に其主義ありとせば、吾は「教育主義」と稱えん。云く、國家主義、云く、世界主義と。其意、國家を主義として、世界を主義外に置くの意か、もしくは、世界を主義として、宇宙を主義外に置くの意か。今の人、教育に主義を論ずるとき、常に人を教育する心得のみにて立論す。吾黨は、試ろみに、其人が自己を教育するの覺悟に於て、主義を言はんことを望まん。國家主義と言ふ人は、先づ其主義にて自己を教育せよ。世界主義と言ふ人は、先づ其主義にて自己を教育せよ。存外に究屈にして、實行の遂げがたく、人は活物にして、望は千態万状なることを覺り、中々に何々主義などと容易に制限は仕がたきものと知了せん。之れ相互の論駁に優る。極めて簡易なる論斷方也。

煮豆燃豆萁、豆在釜中泣、
本是同根生、相煎何太急。

「日本宗教」を歡迎す

出るに先だちて、種々の評あり、出でし后にも、種々の評あり。取分け、基督教社會に於て斯る評の多きを觀じて、扨々物を氣苦勞にして、何事も吾が思ふ如くにしたしと熱する人の多き社會かなと、今更の如く驚かれたり。吾社は、宗教上に於て一定の確信を有す、不肖なりと雖ども、現に疑惑質問の中に立てりとは自覺せず。然れども、我國宗教界の大勢の爲に、事業として「日本宗教社」の事業に熱賛の意を表し、社員中の多數は、之に助力しつつある也。「日本宗教」は告白すらく、乞ふ一年の壽命によりて些さか其天職を果さんと。吾黨は之に温たかなる同情を寄せ、其使命の遂げられんことを切りに望むもの也。故に、左に其の發刊の主旨を掲載して、同志に示す。

(一) 嚴莊端麗の至誠を發揮し、敬崇渇仰の精信を傾盡して、心を法界の美に托し、躰を因果自然の戒律に同じくし、物に痛み、哀れに動きて、同情の念ひ濃やかならんとは、眞人の祈請して止まざる所也。若し夫れ、有無を一つにし、是非を

渾融し、差別を超脱して平等に入り、悟然として大化大同の妙域に達したらんものは、即ち是れ、花紅く、柳青く、冬寒く、夏暑く、緑兒の愛らしきに胸せまり、宮の神々しきに涙こぼるる、平當純白の自然に入りたるもの也。故に、大人は小兒の如く、大悟は凡の如し。宗教の人とは、天地に安住して其處を得、無常流轉の間に、其不動心を自得せるものに非ずや。

（二）　水自から流れて、自から識らず。時に激昂奔躍する所以のものは、地勢の然らしむるもの也。故に落下して千丈の瀑となるとあり、激して万百の珠玉を散らすとあり、分れて糸の如くなるとあり、横流蜒蜿して大白蛇の匍匐ふが如くなるとあり。乃ち是れ地勢による、水を以て相異なれりとすべからざる也。教界の神仙、山を出でて街に叫び、市に傳へて、宮殿に入るとある所以のもの、豈亦然らずや。神仙、素と平らかにして、嘗て異常の事なし。一たん、人心の安きを得ざるに心動き、苦喚の聲、耳を劈ざくを聞き、毒塵、神靈を汚し、害邪、愛らしきものを惑わすの慘狀を見ては、則はち、挺然、身を起して、救濟に趨むかざるを得ず。此に於てか、説法あり、傳道あり、宣教あり。

（三）　神仙の身を起す所以は、已を得ざる所以なり。諸聖豈に自から一宗一派を創開するが爲に起たんや。經典を知るものは、釋尊に及かず、論語の心あるものは、孔夫子に如かず、而も、二聖は、未だ親から其の書を讀まざりし也。人ありて當時もし儒教佛教なる名を掲げて二聖に問はば、二聖は未だ之を聞知せずと答へん。諸聖もと知らず、諸聖素と意なし、但だ其の精心の衰へて、其の形式の殘遺する頃ひや、即はち宗派の名起る。故に此名、時として、形骸を埋めたる墳墓の標號たるに過ぎざるとあり。

（四）　白蓮、泥土の中より抽くを見て、其美は單に花にありと言ふべからず。美は、泥土中にあり、濁水中にあり、莖葉中にあり、亦た瓣花の中にあり。然れども、人目普ねく見るの形に寓して、發揮して明らかに顯現するにあらざれば、人、其美を認たむるとなし。夫れ、法界の花、華嚴の美、天地の詩、人心の妙、宇宙万象悉とく宗教にあらざるはなし。然れども、「人」之を顯現し、而も、其の實行の形に於て發揮するにあらざれば、普ねく知らるるとなし。宗教の理に新らしき

とあるなし、たゞ之を顯現するの人に於て新鮮たり。宗教は、即はち「人」を要す。

（五）　惟へらく、日本宗教界將に新生氣を起さんとすと。人皆な之を望めども、未だ其の何者たるやを知らず、道士、只管らに首べを傾むくる耳。吾黨惟ふ、日本元來東洋の靈氣を鍾めて、自から神秀の特色を存す、其の宗教界に煥發して、世界の大道に附益するもの必らずや多からむ、今は則ち其舊宗教を守り新宗教を迎えて、正に混和折衷の靈用を施こしつつあるの時と。宜なり、其外狀の沈定して、內容の鬱勃たるとや。

（六）　蓋し大人の起る、將に遠きにあらざらんとす。大人、何處にありや。惟ふに、何人も知ると能わじ、蓋し、大人彼自身も亦之を知らざるべし。但だ知る所のものは、大人將に出んとするの時勢たると、一つ。大人、必らずや、出でざるべからざると、一つ。而して、此如き大人は當に生るべし決して造る可らざると、一つ。即はち、是耳。吾黨、豈に之が爲に道を啓くとを自任すと言はんや。然れども、大人出るの時、若し人々をして速に之を識認せしめ、速に光明に來るとを得せしむるに於て一分の効力あるを得ば、至大の光榮にあらずや。如此くせんには、則ち、宗派の陋域を混同し、教界普通の意識を長養し、各宗派共同の美を認定し、眞誠宗教心の需要を明らかにし、以て先づ日本宗教の心を公大正明にするにあらんか。

（七）　今や、各宗、宗に僻し、各派、派に偏す。互に大道を私して、小岐に入る。人心、未だ安んぜざるに法士、先づ爭ふは、豈に救世の慈悲ならんや。戰の紀念新鮮に、愛者を失へる人太はだ多し、何ぞ顯正積極の傳教なきや。吾黨素と人に教ふ可き者に非ず、教を請はんとするもの也。則ち、同志の需に代つて、玆に大公至中の法教を要め、各宗派の先輩及び教外の潛龍に就て、其教を請ひ、總ての宗教の精美を尋ね、所在る宗教文書に於て其の福音を聞かんと欲す。

學不ㇾ足ㇾ讀ㇾ書者、然不ㇾ讀ㇾ書又不ㇾ知下所ㇾ以ㇾ爲ㇾ學之道上、讀書是第二等事。……………………朱　元晦

六經註ㇾ我、我註二六經一、六經皆我注脚…陸　象山

堂上遠ㇾ於二百里一、堂下遠ㇾ於二千里一、君門遠ㇾ於二万里一、……………………菅　寅吾

女學

女子教育十年後の化粧

娘を持てる親の心に、其が立身を冀ねがはざるものあらんや。然るに、立身は、世の受けの善きによつて、遂げらるゝものゆえ、親として、娘が世に賞められんことを望まざるはなし。俗に、娘を賣物と謂ふ、人間を稱して賣物と言ふは、甚はだ忌はしき言葉ながら、需むる人の所望に適はせて、其の品價を高くせんとする衷情の切なる所ろより言はば、商人が賣り物を大事にする熱心にも越して尚ほ熱心なる眞情ありと謂はざる可らず。

夫れ、既に賣物なり。故に、世人の好みを察し、ハヤリに注意し、評判に思慮して、何如にもして、尤とも善き口に買はしめんとするは、親の至情なり。左れば、父母が施こす所ろの女子教育の目的は、十中八九、世の所望に適應することを得べきものとなさんとするにあり。故に、世人の好み、其のハヤリ、其評判等によつて、女子教育の仕方を一變するは、當然の數なり。眞とに、歎息すべきことの様なれども、左りとて、普通の親心の所發としては、已むことを得ざるもの也。

吾人は、此の親心を許して、善し惡しは言はざるべし。たゞし、之を至情として許し乍ら、一言、其の至情の爲めに、注意する所ろあらんとす。これ、折角の親の慈悲が反つて其子の爲の讎となり、もとこれ親たる人自身の本意にもあらぬ反對の結果を生ぜんことを恐るれば也。

試ろみに問はん、慈悲ある親御が、其の愛孃をして世に出でて立身せしめんとする其世なるものは、凡そ、何年后の世なりや。八才、小學に入つて、十一才に尋常科を畢り、爾來高等小學に入りて何年を過せしか。先づ、十五才にして、高等科を畢えたりとせん。扨て十五才、高等小學を卒業したる愛孃を、高等女學校もしくは之に類似せる女學校に入るゝとする乎、もしくは、何處かに預けて一と通りの女藝を修めしむるとせんに、少くとも之に四年はかゝるべし。此の四年の后には、二年ほどは、家に置て實地の家政を學ばしめざる可らず。而して后ち、其縁熟し、才子佳人相ひ契りて、初めて、

世に出るとせんに、そは、高等小學卒業后都合六年、即はち二十一才の頃の時世なるべし。

左れば、高等小學第二三年の頃にある愛孃の爲に、前途、何如なる教育を施こして、立身出世せしめんかと、思慮しつつある親御に告ぐ。其の心に蓄き玉ふ出世の世なるものは、凡そ八九年后の世にはあらずや。即はち、八九年の后ち、始めて世に出で、始めて人の妻となるものの爲に考へつつあるとにて、更に此の妻が人の子の母となる頃はひの事迄で慮ばかるとせば、即はち十年、十一年后の事を思ふにてある也。もし更に、其子、即はち吾が孫を教育するの母として今の愛孃の前途を慮ばかるとせば、少くとも、十四五年以后の事は思ふ譯にてあらずや。

左れば、今の愛孃が出世の世を考ふるときは、十年以上、十五年以后の世を慮ばかりて決せざる可らず、これ眞とに、愛孃の爲め世の流行を思ふものとは言ふべけれ。然るに、今日今年の世の所望を思ひて、而して、能く愛孃を世の好みに應ぜしめんと言ふは、宛がら十五年前即はち明治十三四年の頃の趣向を出して恰かも好く今年の求めに應ずるならんと信ずるが如し。

此故に、眞に愛孃が出世立身を望み、世に對して恥かしからぬ用意實力を所有するものとならしめんと欲する父母は、少くとも、十年以后の社會の狀態を預想して、之に適應するよう今より教育せざる可らず、これ、眞乎に、娘を思ふ親の慈悲にはあらずや。

夫れ、十年以后とは、內地雜居の實施以后五年の世の中なり。シベリア鐵道成就し、亞細亞の大勢一大變する后ち更に六七年立ちたる后の世の中なり。去年以后一年にして世界に立てる日本の地位を斯迄で變化せしめたる、其一年を更に十度繰反したる后の世の中なり。即はち、十年は一と昔しと言へる其の一と昔を后に至つて遠く感起すべき時世の爲に、昔の今に於て今の后世の爲に教育するもの也。何んぞ、只だ眼前舊時の流行を追ひて、朝顔の只だ一と時を全盛と見做すべけんや。吾人は、今の父母が、お化粧主義によつて其娘を教育するを、必らずしも惡しゝとせじ。但だ、其のお化粧は十年以后の爲めなれば、即はち、十年以后の見物の爲に化粧せしめんとを勸告して止まざるもの也。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女子徒弟學校

『教育時論』記者は「女子教育奬勵の順序」を論じて、之に三樣の方途ありとし、其一をもつて、國庫支辨にかゝる女子徒弟學校の設立にありとせり。

此方案は、太はだ佳なり。この案たる、啻に女子教育奬勵の爲に効あるのみならず、寧ろ、國力を迅速に增進し、國民を一般に富强ならしめ、且つ中等以上の室家を改進せしむるに於て、著じるしき利益あるべしと思惟せらる。

尋常小學を卒業したる下等社會の女子は、或ひは、雇女となり、或は、職工女となり、或は、自宅に於て夫々の仕事を爲すなるべし。此等の女子に、今ま一層の教育を授くるとは、單に彼等が爲の幸福ならず、亦、男子の爲、室家の爲、及び未來の國民の爲の幸福なり。彼等、尋常小學的の開發を受けたるのみにて、國民が婦女子たるの智識覺悟は、少しも教へられず。內助の道、家政の法、育兒看護等の仕方を毫も知らざるに於ては、其の不利益は、女性たる彼等が上にあらんよりは、寧ろ、男子の上に、又將來の國民の上にありと言はざる可らず。故に、吾等は、單に女子教育奬勵の方案として、之に贊同するのみならず、更に一般の國家問題として、切なる同意を表せんとす。

扨て、かゝる必要によりて、所云る女子徒弟學校とも稱すべきものを、設立する大躰の經綸を言はば、

一 十三才乃至十六才の女子にして、高等小學又は高等女學校等に入學せざるものをして、特別の事情なき限り、悉とく入校せしむる事。

二 生徒就學の時間は、一週一日即はち、午后若くは夜分(地方の情況及季節によつて變ず)二時間とす。
但し、學校は可成く毎日開校し、各生徒をして、其來學の曜日を定め、交る〳〵來り學ばしむる事。

三 十三才乃至十六才の女子を雇使するものは、一週一日、其の行て學ぶべき日を必らず給與すべき事。

四 學科は、筆、算、讀物、簡易理科、地理歴史の大躰。裁縫、看護、育兒、家政、並に、作文(受取、注文、電信文、日記文、其他)簿記、諸届方、現行法律規則の大躰。修身、禮儀、應對、客あしらひ方の類。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

五　教場は、小學校に於て。教師は、小學校教師、就中、其女教師の補助と、專任教師とを以てする事。

六　無月謝。國庫支辨。四年にして、卒業せしむる事。

大略、右の如し。此に類するの方、現に獨逸國に行はる。下婢雇女のたぐひ、皆な玆に於て教育せられ、智識と躾とを普及せしむること、甚大なり。我國に於ても、もし前記條項の如き度合ひにて先づ着手し、追々にして改進を望むの計畫たるに止まらしめば、今日に其の成立を見ること、敢へて難きにあらじ。

念ふに、下婢雇女の輩にても、此類の教育を受けなば、大に主婦を助くることを得べき品格を生じ、隨つて、主婦が何事にも獨り忙わしく從事する其仕事の多分は、優に彼等によつて分擔せられ、自から主婦なる人の餘暇を生じ、隨つて、其の重要なる内助の力を增し、且つ、其の智識を一層進むることを得べき暇まを作らしむべし。斯の如くならば、我國中等以上の室家は、忽ちにして、情態を一變し、種々の方面に於て、大に國力を富强にするなるべし。

時これ壽命の説

近頃ろ、時計製造會社の設立を會議せる席上に於て、某が申すよう。玆に不思議なる因縁あり、即はち、文部大臣と時計製造との關係なり。吾等が此度の計畫に至大の影響あることゆへ、人々、こゝろして注意し玉うべしと也。あまりに、不可思議なれば、何れも怪しみて問ふに。某の更に答ふらく、かつて余が小男、時計を處望して止まざれば、余は之に言ひぬ。もし能く時計を實際に使用すとあれば、直ちに一箇を與ふべし、而して、いよいよ能く善用するに至らば、更に尙ほ好き品を與ふべし。たとひ、金玉の時計を所持すとも、之を利用せざれば、有たざるに同じ。之を利用するには、屢ば、見ざる可らず。朝起きたるとき、時計を見、顏を洗ひ着物を更ためしとき、時計を見、御膳に向ひて見、了つて見、門を出でて學校にゆく時、更に見、途中の何處かにて見、學校に着せしとき亦見るべし。凡そ、斯の如く、屢ば時計を見て、彼の『時』なるものを重んじ、一刻一瞬と雖ども、之を暴りにせず、之を圖齒にせず、一々、時間を計つて切り盛する心得を

養なふときは、自から、規律嚴そかに立ち、萬事整然として、仕事の渉取り二三倍に及ぶべし。斯の如くなれば、勉强の時は勉强に凝り、遊歩の時は快ちよく遊び、自然に時間の秩序を生じて、忙はしき裏、いつも餘裕あるに至るべしナド、話し聞かせしに、小男は、果して其の如く實行したり。此の習ひ久しふして、彼は今や、尤とも好き『時』の使手となり、何時にても、其『時』を知り、亦其『時』を損することなし。余の彼と同伴同歩するとき、滊車などに乘り後れじとアセル折々、ドウダ、間に合はんか否やなど問へば、彼は一寸と、時計を瞥見して、至つて平氣に、大丈夫デス、何處より何處迄は、何分間、それより先は何分間、丁度何分前に停車場に着きますなど言いて毫しも騒がず、則はち、心配し乍ら、行き見れば、果して其言の如し。凡そ、如此きは、最初暫時の修業が習慣となり、後には、自然の規律となりて、心中綽々の餘裕を得せしめ、且つ、いつも『時』を損せずして、無駄に待つこともなく、存外に後るることもなく、人を待たせて失禮することもなく、自から待ち過ぎてアクビを澤山にすることもなし。必竟は、最初の修業による也。『時』これ『錢』と言ふ諺あれども、其實『錢』よりも尊とし。一生の多分、この内にあり。事業の成功、この内にあり。精神の覺悟、亦この内にあり。左れば、小學校の少年などには、分けて此の心得を吹込み、其の所持せる時計を尤とも善く利用するの習慣を得せしめざる可らず。夫には、小學校の敎育に於て、先づ此の覺悟あるを要とし、全國の小學校に於て、此の覺悟あらしむるの根本は、文部大臣の感化力にあり。故に、予等が新に起す時計製造會社の成効も、其の實際に於ける功德も、一つに、文部大臣と相い關せりと言ふべからずや」と說き去れば、喝采の聲、鳴りも止まざりけりとぞ。

此說、きわめて善し。奴の小万が知己、柳里恭は、時計を置いて何んかする、心にだに計る所ろあらば善からずやと言いしが、實にも、時計を處持し乍ら、之を利用せず、之を利用すと言いつゝも、『時』を重んずることを知らぬ族こそ、里恭が一罵倒を受くべきものなれ。大枚の錢を出して、金銀の時計を買ひ乍ら、其時計によつて『時』を善用することすら、出來ぬとあれば、『時是れ錢なる』錢を費やして、又更に其價ひに錢を費やす、かさね〲の愚人と言ふべし。

主婦こそ、分きて『時』を重んじたきものなれ。『時』を重んぜざる主婦の室家は、忙わしきのみにて、渉取らず、人を煩わすのみにて、締まり無し。主人は、素より、來客、出入、僕婢に至るまで、皆な迷惑すべし。『時』を勘定するは、錢を勘定するが如くなれ。之に氣遣ふこと、借財に對するが如くなれ。之を珍重すること、貯蓄金の如くせよ。蓋し、『時』を善く用ふる人は、長生する人と同じ。

家に歸る女學生

（夏休閉校式演説中の一節）

……………私が先頃ろ、東北迄で行きました時、汽車の中で、何處かの女學校の生徒の一團躰と、基督信徒らしき二三の男子とが、一室に乘合したる間だへ這入りました。凡て、先きより乘居る人は、新らしく來りし人の爲に、如何にもして都合して席をつくるが人情なるに、彌ふ膨れかへつて塲所を塞ぎ、ワザ〳〵寢ころんで座を埋めるなど、情けなきものも隨分は見るとなれど、婦人、ことに女學生などには、左る不覺悟は毛頭あるまじと思ひしに、彼の一團躰は、腰かけの上に、澤山の荷物を載せ、新たに這入つた人が、立つたるまゝ眺め居ても、ワキを向いて知らぬ顏を爲し居れり。又、其向ふに居たる二三の男子のうちの一人は、八九冊の書物を包みたるを之れ亦たワザ〳〵己が次席に載せ居りしが、其の上に置いたるは、聖書なるべし、丁寧に表紙を紙にて包み、それに、麗はしく、經語一句を認ためたり、

人その友の爲に生命を捐つ之より大なる愛はなし

然るに、途中の或るステーシヨンより、朴實らしき田舍の老人夫婦が二人乘り込み、あいたる所の無きとて、おとなしく立ち居りて、おそろしげに何んとも得言はざれば、かの人々は餘計の塲を塞いで安閑とし、或女子はもたれ合ひなどし、解けたる束髮を結ぶなど、傍若無人の躰で、少しも、老人等に氣の毒とは思はん樣でした。嗚呼、人その友の爲に生命を捐つとの御教へは、眞に高大絶美の福音なるが、生命はそろか、一個の席すら與ずして、吾はクリスチアンなりと言とも、證明は出來ません。私しは、可成く、女學生の味方をする方に心を傾け居ものですが、夫でさへ、此躰を見ては、さて〳〵女子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

教育の効化何ほどぞと獨り歎いたです。斯の如く、些細の事が、反つて大事となり、眞理大道を證明するの勢力は、極々卑近の所ろにあるものゆへ、地方に歸つて、朴厚忠實の先輩に接し、到る所ろ、女學の結べる果は何如なるものぞと掛念しつゝある人の中へ歸りゆく女學生は、謹んで戒心しよく〳〵注意せねばなりませぬ。地方へ歸る女學生は、吾は女學の傳道者なりと覺悟して居らねば成りませぬ。

◉藤原氏の勢力は女性に因る　久米邦武氏、史學の活眼の講演に曰く、余は嘗て藤原家の如何にして彼が如く權威の大を致せしやを疑ひ之を研究したる事あり、普通の歴史に於ては全く鎌足一人の英才に歸す、彼が如く大家族は能く一日に起るものにあらず果して鎌足一人の英才に由りて起りたるものとすべきや、若し鎌足一人の力にあらずとせば或は不比等の力なりとすべき歟、余切りに之を疑ひ之を究め、而して爰に漸く釋然たるを得たり。もと中臣家は蘇我石川と同じく舊家に屬し已に前代に於ても多少の權威を社會に有したる家族なりとす、而して天下は藤原の天下なりと曰ふを得るに至らしめたるもの鎌足にあらず不比等にあらず其近因光明皇后の力なりしを發見し、加ふるに三千代と呼べる婦人の藤原家に於て鎌足よりも力の大なるものあるを知るに及べり。

近時の女子教育論

櫻井鷗村

一旦衰運の退潮に流されたりし女子教育も、今や復興の氣運に乘し、翼の限り、扶搖に搏ちて雄飛せんとす。日淸戰爭の影響する處、其終局を結びしや、文部省は女子教育奬勵の方針を執るものなりと告白し、帝國教育大會のプルピットは盛に女子教育論を歡迎し、曩きには斯論に口を緘したりし人士にして、到墻に女子教育奬勵せざるべからずと絕唱するものあり。經費節減を理由として高等女學校に、無情なりし縣會の議論は、忽ち之を好遇せんずるの勢を示す。亦盛んなりといふべきかな。今年以後の女學界は、其前途實に多望なりと稱すべし。日淸戰爭が我國一新の機として、万般の事物に、莫大なる影響を加へしは云ふまでもなけれど、就中女學界に及ぼしたる其勢力の如きは、其結果或は凡機の激表に出でんとするものなり。戰爭初めて其釁端を開きしや、此迄微弱なりし女子教育は一層の打擊を蒙りて、いよ〳〵衰微を致さしめたりと雖も、是れたゞに一時外に顯はれたる形勢たるに過ぎずして、其實女學界の爲に、振作勃興の勢力を積ましめたるものなりき。戰爭によりて男子の運動すべき區域、實際に擴張せしと共に、女子が國家社會に關係を有するの說を增加し、また鐵と血とが、國力の鼎を輕重して、勝利榮光の月桂冠、我國民の上に懸りて、無事平和の局を結び、而も此時なほ國民をして、臥薪嘗膽の熱情を懷かしめて、今後益我國力增進を企圖せざるべからずとの、天下齊呼の希望は、幾多人士をして之が爲に沈想積思せしめ、其結局國力の增進は國民の教育に在るとを、明に確認せしめ、かくなると共に、女子教育奬勵せざる可からず之を奬勵せずんば、國民教育の進歩なるもの未だ全きに望むべからずとの、眞面目なる思想を蓄入したるに赴きしを證すれば、今日其火の手を揭げかけたる女子教育操作の世說の歸着する所なり。戰爭の其局を結びしと共に、これが影響として、教育の文壇は女子教育論を迎ふるの聲、やゝ盛んなるを示せり。其聲の教育家として高名ある名士先輩によりて發洩せられたるもの種々、以下試みに其梗槪を擧げん。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

細川潤次郎氏は華族女學校々長たる名譽ある重任を負ふの人なり。氏は皇室の藩屏たる縉紳華冑の阿瞞を薫陶せらる丶に於て、必ずや卓拔なる女子教育意見を有せらる丶なるべしとは、兼て信じて疑がはざる所にして、未だ嘗て之を預り聞くことなかりしが、五月發兌の「大日本教育會雜誌」は吾人をして初めて、氏が高說を仰ぐことを得せしめぬ。氏が爲の高論卓說たる女子教育論は題して「國力と女子教育の關係」といふ。論旨の歸する處を摘說すれば左の如し。

征西戰爭の大勝利は我　天皇陛下の御稜威と、兵士の忠勇とによると雖も、教育もまた預りて其効あり。これより推論すれば女子の教育も亦多少關係なきに非ざるべし。俄に之を見れば頗る緣の遠きに似たれども、其關係ある事實を擧ぐれば、又以て益女子教育を奬勵するの一口實たるを得。此回の戰爭により稍感ずる處ありて、始めて廣く海外諸國を通覽するに貧弱なる國は、必ず女子教育の振はざる所なり。朝鮮支那印度波斯土耳其埃及の如き、女子教育の盛大ならざる國々は國力貧弱なり。之に反して國力富强なると英佛獨墺露米の如きは皆女子教育の盛んなる所なり。以て女子教育の盛んなるは、國の富强なるを證するに足れり。教育は人間万事の根源なれば、教育の盛不盛は、國の盛不盛に關係すべく、又女子教育は教育の一部分なれば、女子教育の盛んなるは教育の完全と謂ふことを得べく、其振はざるは教育の不完全といふべし。

女子教育の盛大なる國家に在りては、女子の交際男子と大差なきを以て、其見聞も亦廣く、其思想は自然國家の休戚に及ぼし、公同心に富むことを得べく、愛國心を有することを得べし。之に反して女子教育の振はざる國に於ては、女子は家庭の外絕えて交際なく、從つて見聞狹く、思想の及ぶ所は、一家一鄕に止まり。公同心乏く愛國心なきが如くなれば、國民の半數は有れどもなきが如く、且男子の國事に從事するものに對し牽制する所あるも、之を奬勵することは殆ど無かるべし。即ち其半數の人は、却て半數の人の力を減却する者となるべし。此亦一國の兵力に關する事なれば女子教育は甚盛んならしめざるべからず。

嘗ては女子高等師範學校長の椅子により、今は華族女學校々長の榮職に在りて、女子教育の爲に十年の經驗を有せる細川氏が、思ひきや日清戰爭によりて稍感ずる所あるが爲に、始めて泰西諸國を通覽して、女子教育の國力消長に莫大なる關係あるを知るを得たりと告白することあらんとは。其語や眞率にして頗る愛嬌あるに似たり、然れども是れ實に氏が女子教育界に於けるの信用をして稍や減ぜしむるものに非ずして何ぞや。

現文部大臣西園寺侯は五月下旬各高等學校及尋常師範學校長を、其官邸に招集し一場の演說をなしたり。この演說たる即ち、文相は國家主義を排して世界主義を國民教育に注入せんとするためなりとの、誤解を世の爲に醸して一時世論囂々たりしものなり。其演說中女子教育に關する意見に曰く、

善良なる國民を養成せんには、必ず婦人内助の力を藉らざるべからず。西洋諸國に於て女子教育に尤も力を用ゐるは之が爲なり。女子自身も亦十分の教育を受けて天賦の良知良能を開發せしむるは當然なり。我邦に於て亦此事に注意するを要す。と、

五月下旬京都は天下の教育家三千餘名を一堂に集めて、古今未曾有の盛大なる帝國教育大會を開くことありき。この大會は教育論理の潮流の一方向は、甚だ速に女子教育奬勵の針路に進みつ丶あることを示したる趣にて、其演壇の歡迎したる女子教育論は、近來稀れに氣焰を吐きたり。辻新次氏は女子教育を盛んにすべしと主張し、又故森文部の股肱たりし現任專門學務局長木塲貞長氏は、女子教育の必要を切論したる後に、

予は最後に臨みて、文部を代表していはん、女子教育を奬勵するは文部の方針なり。

と述べて、文部の方針を明にしたり。蓋し氏が『故森文部常に語りて曰く、學校には母親が其子の徵兵に出づるを送るの繪を揭げて貰いたいと、予今にして其先見に服す。』といへるを以て見れば、氏も亦た戰爭によりて初めて女子教育の國力强大に關することを曉るに至りたるもの丶一人か、非か。

なほ女子高等師範學校長たる秋月新太郎氏は、此大會に其演說原稿を送り某氏之を代讀す。其高說は載せて、七月發兌の『大日本教育會雜誌』上にあり、左に其綱領を摘記す。

我國今日の教育界に於て尤も調和を敗り、權衡を失へるものは、男子教育と女子教育との關係なり。統計上女子は男子に比すれば就學者の數大に少く、全体上男子の半數に充たず。且教育の度進むにつれて其數愈減少す。又女子中等教育の設備大に乏しく、男子の爲めの尋常中學校は官私合せて七十四校を算すれ

ども、女子の就いて學ぶべき高等女學校の僅に二十八校に過ぎず。此他基督教徒等の設立に成れる女子中等教育の學校多くして女子教育に忠實なりと雖も、未だ我國の國体風俗習慣氣風等に適せざる所あり、特に女子中等教育の統一調和を缺くの憂ありて、國家の望むべき高等女學校たらざるなり。且現に行はるゝ女子教育にして教育の本旨を失するもの多きは、之を矯正せざるべからず。女子も亦男子と同じく人類なれば之を教育すべきは亦明白の事理なり。然るに女子教育に關し異議を唱ふるものあるは、共に教育の意義を解せざるに由るべし。國民教育の必要は既に万人共に是認する所故に我同胞四千万の半數を占むる女子も、亦國民教育の範圍を脫すべからず。しかも女子を教育するは國民教育の基礎を造くるの洪益あり。又大に國民一般の道徳を進捗せんとせば、女子に教育を施すより大なる利あるとなし。女子教育は女子をして淑女良妻賢母たるの質を盛くさしむるに外ならず。然れども昔の淑女良妻賢母は必しも今日の淑女良妻賢母たるを能はず、是れ社會進步の異なる事は今日の日本と昔日の日本とを別にすればなり。小學教育は女子男子共に等しく之を教育し、中等教育は中等以上の女子には必ず之を施すべし。また中等教育は普通高等女學校の教科と技藝專修科との二種に分るべし。また女學校は躰育を盛んにせざるべからず。

既往現在の狀況に照らし試みに女子教育上特に留意すべきの事項を擧ぐれば左の如し

一、女子に世界的思想を養成せしむる事

一、女子をして自ら同胞四千万の半數を占むる國民たるの觀念を鞏固にせしむる事

一、女子をして自ら家政に任ずるは天職なりと雖も、女子たるの本分は獨之に止まらず、國家維持の本分を擔當するに在るとを悟らしむる事

一、家庭にありて子女を養育する女子に於ても善良有爲なる國民を教育するの念を固く抱かしむる事。

秋月氏は之を統計に照らし之を事實に徵して、女子教育管見を論ずると頗る勉めたり、然れども氏が說を以て未だ女子教育の大精神に獨得徹底したるの意見なりと許すを能はず。氏の女子教育上特に留意すべきものとして擧げたる四項の教育精神の如き、之をいふとは易くして、之を行ふに至て初て難し、夫れ如何にして之を實施するとを得べきか、希くは氏教ふる所あれ。

帝國教育大會の女子教育を好遇したることは、たゞに以上先覺諸氏の高論をブルピットに歡迎せしのみならず。また女子教育部門會なるものを開きて、女子の躰育の由るべき方法を討議したるに、日本的躰育を起し、日本教育學の目的を確定して、躰育に重きを置かしめ、美麗の標準を改めて、蒼白瘦身の女子を愛するの風習を矯正すべしと唱へたる教育家あり、且つ高等女學校にては內助的婦人を養成するを可とし、また女生徒躰操科教員は男子よりも女子を用ゐるを以て適當とするてふ大多數の决議をなしたりといふ。堂々たる教育大家の集會にてしかく小兒らしき討論决議をなすなど、大人氣なき次第なれども、我教育界はこれが爲に大に影響を蒙るとあらん。之を全躰より觀察すれば教育大會が女子教育論の氣焰を揚ぐるに至りしと、由來大勢の然らしむる所なりと雖も、この大會がまた、この大勢を助長して、女子教育界進步を增進したる事少々ならざるべきは、後日を待て其然るを見るを得ん。

日本教育社會の牛耳を取りて、識見に富み議論公平なる教育時論は近來また女子教育論に熱中して、其第三百六十九號は、『女子教育奬勵の順序を論ず』といふ社說一篇を載す。其要に曰く、

女子教育の方針を定むるは、男子が教育上より養成したる義勇奉公の觀念を實行せんとするに際し、また實業の爲に家國を辭せんとするに際し、內顧の患ひなからしむべき目的に須らざるべからず。即ち內助的婦人を養成するを以て其方針とすべし。之を方針として女子教育を奬勵せんとせば、第一下等社會にて、男子が遠征軍に從ひて渡航するとき、若くは遠く商業の爲に海外に赴くとき、彼をして內顧の憂なからしめんが爲には、其女子に、義務就學年限を過ぐれば夫々の職業教育を授け、兎も角もして一家を支ふるの力を備へしめ、其餘暇時間を限りて婦女子の心がけ、家政育兒などの大意を口授する女子徒弟學校種のものを設立すべし。第二には中等以上の家庭にては、其主人が或は軍旅に從ひ、或は商業の爲めに遠航するとき、其主婦たる婦人が主人不在の時もよく家事を料理し、兒女を教育して、其家名を辱かしめざるもの稀れなり、これかゝる万一の日に備ふべき精神的教育の欠乏によるが故に、之に意を用ゐて教育を施さ

ざるべからず。

女子徒弟學校を起さんとするには、下等社會の女子よりして之に學ぶが爲に毎月纔許の謝金を徵收せんとは、勢不可なる所なれは、國費の支給によらざるものなり。また中等社會に至りては、成るべく私立女學校の設立を奬勵し、新設の私立學校を保護誘導して完全のものたらしめなば、時運の向ふ處、女子自ら相當の資金を費して入學すべきが故に、其社會の女子教育は振作すべく、其女學校は維持するとを得ん。且全國小學校にて女子の就學は男子よりも少し、今後の日本にては女兒も男兒も同じく國民教育を授け、國民たるの觀念を養はしむるの必要あるを以て女子就學を督勵せざるべからず。女子小學就學を督勵すると女子徒弟學校を起すとは等しく國家事業にして、國費を以て負擔すべきなり。若し二つながら之を負擔するは國費の堪ふる所ならずは、先づ小學校を完全にして多數の不就學女兒を就學せしむるが爲に國費を用ゐべし。これ先づ根底を牢固にするの主義なればなり。

以上教育時論記者の女子教育奬勵方針論の要領を窺ひて其意見の由來する處を洞察するに、これまた這般の戰爭の與へたる大なる日本國てふ思想によりて開發せられたるものなり。日清戰爭の女子教育操作に於ける其影響もまた大なるかな。昔は普魯西國、大奈破崙の爲めに万世の耻辱を蒙ふりて、翻然國民の教育を盛んにし、以て會稽の耻をチートルローに雪ぎ、佛蘭西は獨國とセダンに戰かひ敗れて、ライン河畔を失ひ、獨乙人が「ライン、ライン、獨乙のライン」を歌ふの聲に憤激して、さきにナポレヲンによりて退けられたりし、ペスタロチーのＡＢＣを歡迎し、今や國民教育の事此國に盛んなり。我國日清戰爭以後の社會が國民教育を奬勵し、殊に女子教育を振作せんとするは、益國力を增進して世界の表面に雄視すべき我國が國是として執るべき最健全の策にして、實に天下の慶事なり。且つ未だ其方針の如きは邈焉測知すべからずと雖も、文部省の意向は鋭意女子教育を奬勵するにあるを示す。天下の女子教育は之れより進歩せん。然れどもたゞ恐る、嘗て斯道の爲に忠實ならざるもの、世の風潮によりて、此處彼處に女子教育者の假面を装ひて蹶ひ起り、其行爲却て女子教育を害するとあらんとを。吾人は日本女子教育界の既往の歷史に鑑みる所ありて、甚だ之を恐る。たゞ望む處は誠意熱心にして身を斯道の爲に委ずる人士輩出して、天下のウヰーカー、セックスを率ゐて國家の富强を計り、國民の幸福を希ふて、我國をして世界に雄飛せしめんとを期し、而も遠大なる希望を人性の進歩と神性の發達とに置きて、造化の大目的を成就するに與りて力を奐せんとなり。吾人の信ずる女子教育最大の目的なるものは實に此深遠宏濶たる處に在るものなり。

隨感

○吾にはゆるせ

人ごとに一つの僻はあるものぞ、我にはゆるせ敷島の道。かくの如き高慢にして橫着なる辯解は、兎角、我まゝなる人の心に起り易きものぞ。凡そ、僻の僻たるは、其の自から除きがたきの處にあり、既に制せられて其羈にかゝり、既に束縛せられて吾が本領の自由を失なへる心地し乍ら、而も猛然として解破靈脫するとを能くせざるときは、其の何物たるを問はず、即はち、既に其の僻となりたるとを否なむ可らず。左れば、其現象に高下雅俗の差別ありて、或るものは、風流に傾むき、或るものは、情慾に流るるとも、ひとしく同もに僻たるとを免れず。既にもし一樣に僻たるとを知らば、此の五十歩を以て、彼の百歩を笑ふは、謂はれなきにあらずや。吾は酒を禁ずるとを得たり、然れども、煙草を禁ずるとを得ずと言ふものあらば、未だ眞に禁酒の精神を盡さゞりしもの也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾は、金を貪ぼるとなし、然れども、名譽を好むの心を去りがたしと言ふものあらば、未だ眞に脫俗の精神を盡さゞりしもの也。何となれば、禁酒脫俗の修練の眞の要素は、酒にあらず、金にあらずして、「吾」を束縛すべきある物を解破するの氣力にあるを以ての故也。人の高慢にして、我儘なるや、久し。種々の辭柄を立てゝ、自からの辯護となす。吾には斯くほどの事はありても然るべし。吾には、斯許りの事は容赦せらるべしと。既に『吾』にはの心を以て吾が僻の爲に、辯護を爲すや、其の現象の如何に風雅なるに關せず、均しく亦た弱點たるを免かれず。嗚呼、「吾には許せ」の『には』こそ、不屆のくせものにてあるなれ。

○理想を美として自から許す者なり

之を「言」に於てすれば、相ひ同じ、之を「行」に於てすれば、相ひ反むくもの、一つは、理想にして、他は、實際なればなり。理想に於て望み見るときは、其美を認たむると容易けれども、實際に於て、直ちに其美を識得せんとは、太はだ難し。故に、度量狹隘にして、偏我固陋の小見地に迷執する族にても、光風霽月、洒々落々など稱えて、至つて之を德なりとし、而も此の德を慕ふの故によりて、自己にも亦既に此德あるかの如く思惟するとあり。其の自から任ずる爲躰を觀て、笑止にもあり、無邪氣にもあり、憫然にもあり、人生常に斯くの如しと觀じ來つて微笑するの君子なきにあらじ。故に、人に忠告するに、度量濶大なれ、洒々落々たれなど言ふは、人情を知らざるの言ひ方なり。誰か、此等の德を美なりとせざるものあらん、既に美なりと感じつつありて、而して自己に其德欠けたりと思惟するもの多からんや。必竟は、「行」を以て「行」に對し、他をして、直ちに實際に相ひ比較せしめ、自から明暗を對照して、以て衷心より反省自覺せしむるの外、良策なからん也。

○名、歷史、及び聖經の句

ヲランダ國の酒店の一つに、バイブル、ハウス(聖經舍)と稱え、門に聖經の一句、

水を飲む可らず、左れど少量の葡萄酒を用ひよ

の題字を揭げて、盛んに、酒類を賣るものありけり。扨て、之をバイブル、ハウスと言ふ所以のものは、むかし新敎が初め

て此國に入りたる時、此家屋を使用せしとありて斯く名づけしが爲とぞ。歴史、かくの如し、名の美なると斯の如し、聖書の經句に準由せること斯の如し、而して其實際の如何なるかを見よ。所云ゆるチーソドックスなるもの、屢しば此類の事あり。

○戰時もののふの病

千歳一遇の時節に會し、生平の御恩、かゝる時にこそ報ひ奉まつるべけれ、同僚後輩すべて先發し、武士の譽れ、海の内外にかゞわしき頃ほひ、ひとり病痾の身となりて、きたなくも蓐の上に起伏し、夢に劔戟を握つて敵を斬るよと見れば、三更の鐘さびしく消えて、人は快ちよげに熟睡せり。斯て、戰雲の日月、一とせを廻り、將士血衣を着て、歡呼の間だに凱旋するとき、起き上つて窓下に向つて叫ぶ聲はしわがれ、振ふハンケチは濕りけり。之よりして、病頓かに重く、忽然として死す。送葬の人、遺恨つきず、ましてや、其の妻をや。されど、逝くものの恨みは、人々の憾みよりも、尚ほうらめしくありけんかし。

○圓朝子の槍道

圓朝子は、『槍道』を高橋泥舟先生に學びけり。落語談情、言く々、眞に迫り、能く聽く者の肺腑を突くは、此の道を得たればならん。一藝に達するものは、道に達す、道に達するものは、含默して相ひ覺り、了々として互ひに好けん。修めたきは、實に道にこそあるなれ。

○寧ろ草木を友とせん

凡そ、「ズム」と名づくるときは、眞味の過半を失ふ。パンセイズムも亦た其の類なり。惟へらく、人は万物の靈長なりと。靈長なるが故に、万物の性を具し、万物は人の性の一分を具す。何の故に、草木を無情と云ひ、雨露に心なしとは言ふや。余は、彼等が語る一種の言語によりて、其濃情細心を聞くとを得る也。渠詩人、巧みに形容の詞を造るにはあらず、眞とに其情に感じて、實際に之と交わるにてあるべし。万物が具する人の性に感交すれば、即ち信仰を失なへりと評するものあり。余は寧ろかゝる評を甘受して、博く土井草木昆虫

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

などの間に友情をつゝけんと欲す。

○早起快然のにほひ

夙く興きて四方の戸を明はなち、庭前に向つて霏々の雨聲を觀、靜かに座して、心耳を澄せば、之よりして聞く所ろの何如に妙なるや。人性、もと聖善、さゝめく所ろ、何んぞ美くしきや。念ふ所ろ、何んぞ潔よきや。香煙、むすぼれて離れがたく、朝風ゆかしく薫じて天地かぐはし。友を慕ひ、古人を倘とび、史上の知己と相會す。此邊獨樂の消息は、何の筆ありてか能く敘し盡さん。

○遠離近思の情

たゞ二人の間の秘事を央ばにして、東西千里、遠く相念ふの時は、何如なる秘事も、天の香雲に包まれて、いと神聖のものとはなる也。之を連珠にして、かなた此方に貫ぬき通じたる一線の糸は、いかに細くとも斷つとなし、いかに遠くとも幽けきとなし。脈々たる温熱、たゞちに此より通じて、切らば、何處よりも血を出すらし。

磯野松風

新刊書

○戰時平時救急看護法
ドクトル佐伯理一郎君譯補　吐鳳堂發兌

本書は獨逸サキソン國陸軍一等軍醫正博士リユーリマーン氏の「平時に於ての怪我及び戰時に於ての負傷に對する第一の看護」といへる書を譯述したるものにして、素より一小冊子に過ぎずと雖も、簡にして明、且つ挿畫多きを以て救急法を知るに頗る便利なり。

定價三十五錢。

○普通看病學　巻上
ドクトル佐伯理一郎君譯補　吐鳳堂發兌

本書は佐伯醫士が獨逸外科の大家、維也納大學教授博士ビルロード氏著す所の看病法を譯述せられたるものにして、看病婦たるもの、また看病婦たらんとするもの丶必ず讀むべき好著なるのみならず、いやしくも一家の主婦令孃として、目に文字あり、かつ病氣には藥よりも看病が大切なるを知れるものにして、此書を研究せば大に會得する所あらん。

定價三十五錢。

○家庭理財
民友社發兌

家庭叢書の號外として發兌せられたるものなり、貯蓄、投資等を簡易明瞭に説明して、一家の主婦に理財の道を教へ、蓄財の法を知らしむ。

定價十錢。

○征清詩集
柳井絅齋編　博文館發兌

日清大戰は如何に漢詩家をして、其詩腸を絞らしめしやを知るに足るべき詩集なり。

定價十錢。

○明清盛衰史
有文館出版

て此國に入りたる時、此家屋を使用せしとありて斯く名づけしが爲とぞ。歴史、かくの如し、名の異なると斯の如し、聖書の經句に準由せることも斯の如し、而して其實際の如何なるかを見よ。所云ゆるチーソドックスなるもの、屢しば此類の事あり。

○戰時もののふの病

千歳一遇の時節に會し、生平の御恩、かゝる時にこそ報ひ奉まつるべけれ、同僚後輩すべて先發し、武士の譽れ、斯の内外にかぐわしき賑はひ、ひとり病褥の身となりて、きたなくも斯の上に起伏し、夢に劔戟を揮つて敵を斬るよと見れば、三更の鐘さびしく消えて、人は快ちよげに熟睡せり。斯て、戰場の日月、一とせを廻り、將士血衣を着て、歡呼の間だに凱旋するとき、起き上つて窓下に向つて叫ぶ聲はしわがれ、振ふハンケチは濕りけり。之よりして、病癒かに重く、忽然として死す。遺族の人、遺恨つきず、まして、其の妻をや。されど、逝くものの恨みは、人々の憾みよりも、尚ほうらめしくありけんかし。

○回朝子の榆道

回朝子は、「榆道」を高橋泥舟先生に學びけり。落語談情、言々、眞に迫り、能く聽く者の肺腑を突くは、此の道を得たればならん。一藝に達するものは、道に達す、道に通ずるものは、含默して相ひ覺り、了々として互ひに好けん。修めたきは、實に道にこそあるなれ。

○野の草木を友とせん

凡そ、「ズム」を名づくるときは、眞味の過半を失ふ。パンセイズムも亦た其の類なり。惟へらく、人は万物の靈長なりと。靈長なるが故に、万物の性を具し、万物は人の性の一分を具す。何の故に、草木を無情と云ひ、雨露に心なしとはいふや。余は、彼等が語る一種の言語によりて、其深情細心を聞くことを得る也。眞詩人、巧みに形容の詞を造るにはあらず、眞とに其情に感じて、實際に之と交わるにてあるべし。万物が具する人の性に感交すれば、即ち信仰を失なへりと評するものあり。余は寧ろかゝる評を甘受して、博く土芥草木昆虫

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

などの間に友情をつゝけんと欲す。

○早起快然のにほひ

夙く興きて四方の戸を明はなち、庭前に向つて霏々の雨聲を觀、靜かに座して、心耳を澄せば、之よりして聞く所ろの何如に妙なるや。人性、もと聖善、さゝめく所ろ、何んぞ美くしきや。念ふ所ろ、何んぞ潔よきや。香煙、むすぼれて離れがたく、朝風ゆかしく薫じて天地かぐはし。友を慕ひ、古人を偲び、史上の知己と相會す。此邊獨樂の消息は、何の筆ありてか能く叙し盡さん。

○遠離近思の情

たゞ二人の間の秘事を央ばにして、東西千里、遠く相念ふの時は、何如なる秘事も、天の香雲に包まれて、いと神聖のものとはなる也。之を連珠にして、かなた此方に貫ぬき通じたる一線の糸は、いかに細くとも斷つとなし、いかに遠くとも幽けきとなし。脈々たる温熱、たゞちに此より通じて、切らば、何處よりも血を出すらし。

新刊書

磯野松風

○戰時平時救急看護法　ドクトル佐伯理一郎君譯補　吐鳳堂發兌

本書は獨逸サキソン國陸軍一等軍醫正博士リューリマーン氏の「平時に於ての怪我及び戰時に於ての負傷に對する第一の看護」といへる書を譯述したるものにして、素より一小冊子に過ぎずと雖も、簡にして明、且つ挿畫多きを以て救急法を知るに頗る便利なり。

定價三十五錢。

○普通看病學　卷上　ドクトル佐伯理一郎君譯補　吐鳳堂發兌

本書は佐伯醫士が獨逸外科の大家、維也納大學教授博士ビルロード氏著す所の看病法を譯述せられたるものにして、看病婦たるもの、また看病婦たらんとするものゝ必ず讀むべき好著なるのみならず、いやしくも一家の主婦令孃として、目に文字あり、かつ病氣には藥よりも看病が大切なるとを知れるものにして、此書を研究せば大に會得する所あらん。

定價三十五錢。

○家庭理財　民友社發兌

家庭經濟の號外として發兌せられたるものなり、貯蓄、投資等を簡易明瞭に説明して、一家の主婦に理財の道を教へ、蓄財の法を知らしむ。

定價十錢。

○征淸詩集　柳井絅齋編　博文館發兌

日淸大戰は如何に漢詩家をして、其詩腸を絞らしめしやを知るに足るべき詩集なり。

定價十錢。

○明淸盛衰史　有文館出版

有文館叢書の第一編として出づ、而も時世に投じて出でたるものなり。一讀以て明清史の梗概を知るに足るべきも、百五十餘頁の小册子の事とて、之を以て一篇の史乘たるの價値ありとは解し難し。たゞ讀みやすく、かひやすく、當世向きの便利はあり。

定價十八錢。

○日用百科全書 第一、第二編

博文館發兌

万事に拔目なき博文館は近頃また日用百科全書を發兌し、例の如く十二冊を以て完結する豫定にて、其第一編は『和洋禮式』なり。禮式大意、婚禮式、産事、起居動作、饗應、先智庭訓等を載せて、また西洋禮式一斑をも畧說せり。古來の禮法儀式等を知らんとするものは、此書に就きて窺ふべし。其第二編は『茶の湯と生花』なり。茶の湯法、煎茶法、生花法、茶道沿革、茶人畧傳、見聞問答など好事の人の就いて見るべきもの多し。兩編何れも製本躰裁佳好にして、美麗精細なる寫眞銅板版及錦絵を挿む。定價貳拾錢は菊板二百四十餘頁の書冊にしては頗る廉價なり。

○殉國偉蹟戰爭大探偵

春陽堂發兌

毎日新聞記者長田保得氏著す處なり。日清戰爭に於て大勳を樹て、彼の毒手に罹りて身を國事に斃したる通譯官石川、鐘原、楠内及び三崎と呼ばるゝ山崎、鐘崎、藤崎、三氏の小傳を蒐載し、讀者をして諸氏が殉國の偉蹟に感激せしめ、涙を以て其英魂を追弔せしむ。また載する所の快僧元讃の事蹟は其剛膽英風儒夫をして起たしむるものあり。

定價十五錢。

○日清戰爭繪卷 第七

春陽堂發兌

黃海劇戰の繪卷なり。淸國艦我海軍艦を鏖する狀、西鄕海軍大臣、比叡火災、西京丸苦戰、定遠火災、赤城苦戰、艦中劍舞等の圖あり。圖畫はいづれも精好美麗なりと雖とも、惜むべきは畫に活氣なくして卑俗なるは錦繪と一般なることなり。

定價廿五錢。

○衣笠城

村井弦齋著
春陽堂發兌

弦齋居士曾相州三浦の蹟に遊びて、衣笠城及び櫻の御所の舊蹟を尋ね、普く口碑を探り、舊史を補綴して、稗史二篇を編む。一を『櫻の御所』といひ、他を『衣笠城』といふ。蓋し共に曲亭馬琴が安房に遊歷して八犬傳を作るの筆に倣へるものなり。『衣笠城』は三浦大介一門の事蹟をローマンチクに記述したるものにして、篇中の主人公二人あり、畠山重忠及び白露姬是れなり。この佳人勇士が戀によりて結び、義によりて離るの事實は作者の妙筆巧に之をあやなして、戰國に於ける武士淑女が義と戀との衝突に苦悶するを描く。尾章『秋の月(誰が吊はん)』は其衝突の結果として、頗る讀者の同情を惹起して涙あらしむ。全篇の結撰神髓は『櫻の御所』と同趣にして其三浦荒二郎は此畠山重忠に似て共に勇武沈毅の武夫なり、其小櫻姬は此白露姬に似たる怪力剛膽の勇婦にして、孰も馬琴の稗史中に幾人もあるべき人物なり。弦齋の復讐を描くや、顯ハイパボレチカルに過ぎて、非尋常の事を語るを喜ぶものからいやみあり。又弦齋の人物は涙六の人物の如く、誰彼も、同じ人形に衣を著かへさせて舞臺に演ぜしむるもの丶如し。弦齋文字に巧妙にして筆々輕快なると玉を盤上に轉ばすが如しと雖も、壯重雄活の氣韻に乏しく、且つ此人に於てキャラクターを活寫するの文字を見る能はず。

○半月城

遲塚麗水著
春陽堂發兌

叙事の筋は惰龍法師なる老英雄と、菊丸なる美少年とが、菊水の流れかれぐくなる楠氏の末葉の竹代姬を擁して義兵を擧げつ、勢既に定りて牢きと拔くべからざる足利の世を顚覆せんとしたる孤忠歎憤の物語を、美奈輪左衞門尉が敵の間ながら義心我に報ゆると鐵石の如きと、靜枝の菊丸に於ける綿々の情とを以て味つけんとしたるものなり。麗水の文を行る巧婉又雄渾なりと雖も、小說としての『半月城』は結撰拙劣にして興味索如たり。予は寧ろ其附錄として載せたる『雪の西京』を以て本編に優れるの作と思ふ。麗水由來紀事の文字に長ず。未だ予に於て小說家たるの筆に多く纖巧輕妙壯麗なるを見る能はず。麗水畢竟スケッチの才なり、其長所の發揮を計らずして却て世俗の嗜好に投ぜんとして、涙六にまれて多く小說を物せんとするは、予の遺憾とする所なり。

爛煥

磯の上かぜ

櫻精子

花に背いて眠るぞ春のやまひかな
奥山に咲いて又散る花ごゝろ
仇を厭ふ人も櫻ないさしがり
月の梅わが骨さぐる匂ひかな
花賣りの籠にしよはれて花盛
ごの花も皆それ〳〵の眺め哉
あさがほや萎むそばから咲揃ひ
雨霽れて櫻かゞやくあさ日かげ
浩然のざさりの呼吸や野邊の春
さあ暮れるさんぽいづこに宿もさる
兒の寐顔あやし〳〵てねぬ夜かな
梅さへぞ知ぬ櫻のにほひかな
軒端の梢氣づかぬ花見ごろ
能くれふるわが見發すや小夜時雨
片乳房にぎりて稚兒の寐顔哉
水にすむ蛙は知らず歌舞工
さても又花にも苦し御代の春
乳のみ兒に物いひきかす園の留守
花出たか櫻ひきわる柚男
春來るや蝶は迷はぬ花の道
里はざこ一足づゝの秋の日や
夕やけの磯のながめや天近し
風にさへ向けて帆かげの八重の汐
涙出ぬ胸には鬼のなかりけり
空蠱る雲の上なる月夜かな
名月のくもる今宵の雲の上
太郎は泣かぬ〳〵さいひて一しやくり
更けし夜の星さ語ふ冬木立
鏡にはうつらぬ胸のやつれ哉
一夜さを花に宿かる望の月
梅散つて一さ葉ながし月ごゝろ
風情の涙ころして獸しけり
梅が枝にほの三日月の匂ひかな
二世三世えにし續くや月さ梅

故山靈の裏の仲秋を想ひて

秋高し蛾眉山月のいほり哉
別れ路の月に鳴きゆく雁一つ
拜みたきおもいはで涙かな
天に昇るバベルの塔はくづれけり

故郷の味噌汁おもふ旅の暮
世を捨てし骨もひろはん花の旅
梟の鳴く音可笑しき小夜まくら
熱俐の寐言いぢらし清水さは
鉄如意の涙にうつる世の姿

使徒ヤコブが猫の如き俳調に和して

三寸の舌や地獄のほのほなり
梟鳴く小磯の杜の黒月夜
戀しさや越路に歸る雁の聲
江南は早や蟬のなく五月晴れ
權兵衛の種まく畝の小春かな
月高し千里の風の秋吹きて
ねむられぬ夜中のおもひや時鳥
歸り行く雁や今宵の宿いづこ
五さ歳のちぎりは小夜のねざめにて
可憐なる露の去來のおもしろさ
秋さばを猫にさらるゝ姑かな
わが君を何處たづねん秋の風
朝露のねむる葉末や夏野原
旅に病みてねられぬ夜中の梟かな
白露の白き匂ひや色見えず
越路さへ田うち初むる皐月かな
白露や夕顔棚の朝寐時
苔さむき峡間や蟬の岩清水
人の世のさつてかへらぬ清水かな
鼻うたの田植長閑や越の里
蟬のなく柳の蔭の清水かな
棕櫚さびし芭公城外の小夜しぐれ
流れこの鳴くやにし實梅きけり
涼しさや蚊帳にさし込む月の色
荒磯の砂やなかしさ才字のあさ
日の暮れて夕月のこる花の山
荒磯の月にさすらふ小鳥かな
君去りて今宵さびしき蛙かな
一聲を月にのこしてほさゝぎす
咲く花の心も知らず散りけり
春の旅ゆくさき〳〵の景色哉
散る花をのせ逝く水の姿かな
戀しさや花ちる里のほさゝぎす
あす待ちし花は夕べに散りすまし
足柄の笛のむかしよ今日の月

叔父君の墓を遙かにしのびて

名も知らぬ小草花さく墓の露
暮れながら宿りいそがぬ花の旅

春夢の丈けにのびゆく日和かな
さびしさや鐘ざよめく花の春
野路のかたへに匂ふ花すみれ
葉櫻の春にうかるゝ人もなし
毛虫憎む世間は蝶のうつゝにて
納豆賣る聲も櫻は散りかゝり
白雲の山々かすむ花ざかり
神さびの天の日出る初日影
父母の夕にわづらふ秋三さ哉
二人なら猶さへ旅の寂従めかな
盗み喰ふ犬や怨詩のやつれかし
孫共の御供可笑しき花の山
さびしさをいつ知り初めてけふの春
初孫に案内さして花遊山
春の野にうかれし蝶の行方かな
人戀し鶯鳴く夜の小雨ぶり
日の暮れて憎さへ見えぬ歸路
望見の深くもいか世の花ごゝろ
　右は梅の日庭園せなながめて
名月や豆夜ごもりの田舎寺
桐の葉のそよぐ窓や秋見ゆる
蚊遣火やのこるは淋さ鋪ばかり
涼しさや洗ひ髪の夕まとゐ
青簾風も色添ふ夏の月

おもひ寝の春ぞさびしや夢も見ず
蟬脱したこれやまことの蟬のから
花散りて風の心をおもひけり
さればとて拈華微笑の拈明かす
桃咲いて牛はゐねむる山家かな
押さへそよがぬ春のまひるかな
雲なり〳〵もてなす月のながめ哉
異鄕かけて花見戻りの小唄哉
おぼろ夜や泣く聲あらん花の陰
立ち騒る騒さく旅のやまひかな
夜橋のあたり戯るゝ蝶一つ
見送るや名残なきまで暮の春
先きに立つ孫を御供の寺詣り
別れ路の松吹かけて時雨れけり
花に寄ぐ涙ある世のはたし哉
雲に立つ富士や夕日のうすがすみ
波の鳴くこだまぞさむし峰の秋

濱松のひまや漁村の夕けぶり
露の葉の陰やちよろ〳〵苔清水
冷むぎに細利出てくる暑さかな
蚊遣火に眠もよらぬ月見かな
姫百合や乾物さならぶ店がしら

青嶺の夏野にまよる暑さかな
桐の葉の動かぬ頃や蟬の聲
古池の蓮の浮葉や鯉ひそむ
誰が魂の迷ふ姿ぞ美人草
うれしさの一夜は銀河ほとゝぎす
夏瘦に夾陽占し團が扇
爪牙の夜目も馳かし白牡丹
空通み涙は仲野の雲雀哉
五月雨の徒然ゆるせ菖蒲酒
夢畑に落つる雲雀や子のあたり
ゴルゴタの丘に鳴鳥なく秋の風
湿怖や伏生ばなしの戻り道
卯の花や咲ける垣根の暮れかれて
校園の窓にいさご凝られぬ時雨哉
　使徒行傳二十一章の五六節
河の邊の別れの祈り行くは誰ぞ
瀬を遠み夏は流るゝ枝葉
夕立や今宵は如何に雲の峰
岩清水むすべば月の手にありて
來ぬ秋の姿すゞしき夜蝉かな
合歡の花ながむる頃や菖蒲酒
見されつゝまても折られず白牡丹

五月雨や竹々の背がへる
朝顔や夕露またず萎みけり
畑守りの案山子いかめし秋の風
魂迷ふ宿世あはれや美人草
行く秋や落葉しぐるゝ比翼塚
萬代に義士の陣よむ夜寒かな
長閑けさや降る泡雪の眺めにも
日にまれて咲くぞいぢらし合歡の花
梔子花の露にうつむく風情かな
孫居らぬ今年は如何に柏餅
山百合や咲くも知られず散るも又
バビロンの月を吹き行野分かな
死の床に今日も見にけり花ごよみ
三界は唯だ一心の花もみぢ
雲殿に夏を見にけり蟬の聲
松が枝に蟬の聲しむ岩清水
櫻の葉の陰やいのちぞ日の盛り
待つ秋を暫ばし忘れつ鵜飼舟
常盤木の落葉聲せぬいほり哉

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

○海外愛國の婦人來つて訴ふ

ノルエー國ベルゲン府貴族の令嬢にて、アスリッド、チースと云へる婦人、芳紀二十有五六、巧みに、獨佛以英瑞諾麗の七ケ國の語ばを操す。近ごろ、我國に來り京都に滯在して、切りに鄕國の衰弱を慨し、大に露國の亡狀を憤ふりて、甚はだ我國志士の同情をもさむ。其の世上に訴ふる文は、最初、東洋日の出の國の光榮を稱歎し、翻つて其の鄕國が、日本に離背する事實を列擧し、其祖先が日本武士の如く勇猛なりしとを追懷し、今人中世界を聳動せしめしものも無きにあらずと誇り、且云く、

若し夫れノルエー婦人の地位に至ては吾人は全世界に於て此の如く自由に斯の如く活潑に斯の如く進歩せるものあるを見ざる也。社會階級の如何を問はず地位の高下を論ぜず彼等は至る處社會に好遇優待さるゝ也、是れ啻に彼等が比較的高度の教育を受けたるが故のみならず、又彼等各自に獨立の氣象と大胆なる企業心とを有せるに由る。彼等は何れの點に於ても男子に劣るを見ず。

次に政治問題に及んで、切言する所ろあり、最后に至り、慨然として言へらく、

我ノルエイは、其過去の歷史に於て其現在對露政策に於て其地理的狀態に於て東亞日出國に類する所甚だ少しとせず希くは日出國士の榮光無限なる志士の同情を以て我絕北深夜、太陽の國民に對せられんとを。

然り昨年以來貴邦の博取せる榮光無限なる大勝利は世界何國民が之を祚賀せざらん、然れども我ノルエイ人民に勝りて之を祝するものは恐くはなかるべき也。

(『愛國』第三十號に採る)。

○女子傳道論

山田寅之助氏が青山女學院に於ける演說の筆記、「日本」新聞に拔摘せらるゝを、左の如し、

第一は女子傳道者は美人でなければならぬ、………美は女子の勢力です、美なきの女子は味なきの鹽です、………日本では女子の美の著き事を御膜と申します、…………傳道者に取てなくてはならぬ學問は卽ち人情學であります、…………何へば「水にまかせた浮草さへもすいた風で花がさく」………

斯く摘出すれば、何ものか可笑しからざるべき。若夫れ、女子傳道者の資格を論じて、冒頭、

第一に、女子傳道者は美人でなければならぬ、斯く申さば怪んで言はるゝでせう、そんな無理な注文は應じがたきものであると、或は無理かも知れぬ、然共、傳道の成功には欠く可らざるとです、私は田舍の人の申す事を聞きました、それは何かと云ふに、醜い人を見れば、アレハ傳道者だと申すのです、姉妹方は之を聞て何とも感じませんか、私は慨歎に堪へぬ、女子傳道の振はぬは此に元因すると思ひます、

と言ふに至りて、頗ぶる異様ならざるに非ず。されど、天然の美の得がたきによりて、人爲の美を說き、第一に擧動、第二に衣服、第三に言語、第四に心、第五に雜還を擧げて以て美人たれよと言ふとを聞かば、略ぼ眞意の消息を窺ふとを得ん。

○外人が誤解の一例

寄舍の仲居を藝者と認さむ

アヲル、ハンドブックの著者、近頃レフエリー雜誌に於て、凡て眞心なるものは、人の外圍境遇により生ずる心意の慣性なるを以て、その外圍境遇の變化と共に變動あるものなるを說き、之が立證をなすに當りて、本邦慣習よりして其一例を擧げたり。今茲にその大意を述べんに、論者は先づ希臘人の眞心と第十九世紀英國人の眞心とに非常の懸隔あるのみならず、同じく第拾九世紀文明の民なりと雖ども、その教育及宗教の差異により、各國民の眞心に雲泥の相違あるを說き、厭いて、二年以前日本を漫遊したることある一紳士と晚餐を共にせる際、聞ける所のものなりとて、その紳士が初めて東京に入り、最眞の旅舍に投ずるや、逗留中つれぐを慰むるためにとて、一人の美人を侍らしめられ、勘定の際これに向つて一日一圓を要求せられ、又さる人の紹介にてある家に居寓せし時も、寂寞たる鰥

女の常にその傍に侍り居たりしが此際は前の如く金錢を拂ふことなかりしといへり。是等のことは日本人の眞心には苦痛を與ふるものに非るべきも、他國人は之を以て快からぬ鬪象となすべきを以て、もし英人にして巴里のグランドホテルに投ずるも、藝妓を侍らしめられて意外の仕拂を要求せらるゝ如きこともなく、食後たゞ好景色の名所にでも散策を試むる位のものなるべく、その間自ら東西兩洋人の實踐道德に大差あるを示すなりと。……

ウヰメン、メール記者之を論下て曰く、

然れどもその所謂紳士なるものゝいふ所は、全く虛妄にして、一の根據なき空中の樓閣に過ぎず、然るに不注意にも之を輕信し、眞心論の如き重要の問題を研究する材料となせる論者の淺薄ぞ可憐なる！先には、碩儒スペンサーの如くにして尙ほ且つかの如き誤謬あり、レフエヤーの寄書家にしてこの誤あるは數の免れ難き所なりとはいへ、大に愼重ならざるべからず。

○日本の婦人　（決して男子に劣らず）

左の一篇は孟買領事吳大五郎氏が爲したる日本女子の劣等といへる演說に對しイースタン、ウオールドが駁擊したるものなり日本男子自國女子の劣等を說いて却つて外人に駁せらる寧ろ首尾轉倒と云ふ可し（七月八日大阪每日新聞）。

吳大五郎氏の所說たる畢竟他の日本人も亦日本女子の劣等を認むるが故に日本婦人の劣等は爭ふ可らざる事實なりとの薄弱なる基礎に基くものなり余輩は殆んど十五年間日本に滯在せし事あり故に日本婦人を研究するには他の人々よりも最も多くの機會を有したり而して其研究の結果は斷然余輩をして日本婦人劣等說を排斥せしむるものなり長き滯在の間余輩は聰慧なる日本男子よりも寧ろ聰慧なる婦人の多數に出合へり余輩の知る處にては日本婦人の大部分は皆家計を主裁し且少許の仕事をもなすを常とす彼等は男子よりもヨリ善きヨリ正直なる敎師なり彼等は男子よりも己れの責任を重んず之を換言すれば余輩の遍れく遊歷したる各國女子中にて理想的婦人に近より居るものは日本婦人なり余輩は問はんとす劣等なる種類に屬する女子にして優等なる男子を產出し得可きかと更に問はん生理學上に於て只男子にのみ才識を賦せらるゝの理あるかと吳氏にして此等の疑問を默考したらんには自家撞着と云へる事を悟るならん。

然れども日本の女子は其劣等に甘んずる東洋の蠻習に縛せ多くの智識を得る事より制限せられたり學問は婦人を不幸にするものと認められ殊に男子が自稱優等の地位に對し婦人が劣等の地位に甘んぜざるに至る可きかも掛念されたるなり其結果は如何遂に東洋人種をして泰西人種の後に落ちしめたり故に余輩の注意を乞はんとするは或事物に對する智識の欠乏（そは或時に至れば學得す可き）と心理上に稱する劣等なるものとの區別を明らかにせん事なり心理上の劣等を認識せんとするの標準は頗る愼重ならん事を要す直に或智識の欠乏を以て之を劣等と呼ぶに至つては識者の笑ひを奈何せん余輩は日本の實社會に親炙して婦人の劣等者よりは寧ろ屢々男子の劣等者に遭遇せり余輩は實に日本男子中に於て忘却と注意とに缺けるものにあらずして心理上に愚鈍なる而して望なき人物を屢々見出せり。

○東洋の二女傑

每日新聞は云く、誰か東洋は女權の振はざる國と云ふや、余は東洋に於て二の女傑あるを見る、未だ二の男傑あるを見ず、女傑とは誰ぞ、淸國の西太后、朝鮮の王妃是也と。而して、國民新聞には、兩者を比較して、左の如く反照せしめたり。

一王妃は傍若無人にして常に酒池肉林の歡樂を喜ぶ	一太后は孤愼深く質素にして酒杯の間に其品性を壞らす
一陰謀術數を喜び常に暗中に謀略を運ぐらす	一猥りに謀略を用ゐず術なくして自然に權力を把持す
一常に外戚黨を抱持す	一王室の尊に居て群臣を駕御す
一非常の妄信者にして暗夜まゝ妖怪に驚はるゝ事あり	一迷信少なく智慧多く堅く神明の加護に倚る
一唯我獨尊にして放肆淫亂狂荒度なし	一烈祖以來の典範に則り嚴に其身を律す
一非常に罪を作る	一罪を作らず
一倫理常道に居らず往々殘酷の擧あり	一堅く道德を守つて君主の仁惠あり
一聚斂多欲にして財貨を亂費す	一着實にして蓄財心に富む
一暴飲を喜び汚吏を迎へ姦諂讒佞の士を歡ぶ	一失政を嚴責し賢能を擧ぐるに吝ならず
一白晝公然殿中に於て醜陋事あり	一深宮に於て猶祕密を保てり
一一家一門の光榮に汲々たり	一烈祖の偉業に深慮す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○卒業女學生一覽（二）

◎橫濱共立女學校第八回卒業式に於て（七月一日）

林さし子　戸塚やす子　相馬その子　富田たい子

◎東京青山女學院卒業式に於て（六月廿六日）

普通部本科（尾花梅代子、岡田芳尾子、高田八重子、久野光子）。

英語卒業生（鮫島シナ子）

手藝全科　（横内りき子、佐藤晴子、三宅富士野子）

◎神戸女學院卒業式に於て（同前）

高等科（原タカ子、中谷季子、中村淳子、小林トミ子）

普通科（河合謙子、吉岡松能子、神岡字子、中村久子、村上岡子、織田マス子、山口ヒロ子、山崎龜代子、濱口春子）

◎東京女子學院に於ては（六月二十八日）

全科卒業生	保育科卒業生	本校中學科修業生
五島アキ子	栗本スタ子	藤本ノブ子
栗本スタ子	增野ミチ子	茂木テル子
增野ミチ子	松井トシ子	永野ツネ子
松井トシ子	三輪下枝子	山本シカ子
三輪下枝子	岡　淺茅子	日本中學科修業生
岡　淺茅子	杉崎マス子	有賀ナカ子
酒井ハル子	矢島メヘ子	英中學科修業生
矢島メヘ子		小松クマ子
		大森ミキ子

◎東京修道女館

鶴井えい子、松村はな子、熊宮きん子、

◎西京同志社女學校に於ては（六月廿七日）

專門師範科（緒方春子、内田行子、增田イシ子、足利洋枝子）

專門文學科（岩崎蘭枝子、齋藤糸子、）

普通科（板垣津満子、殿村倉子、不破節子、森脇田鶴子、中田多喜子、津下綾子、阪田映子、末光教子）

◎東京女子神學校に於ては（七月八日）

相原つる子　伊藤たか子　志賀のぶ子　小林でん子　針生ゆり子

田島ちやう子　横山さら子　大島いさ子　菊地さよ子　三好なみ子

◎仙台宮城女學校に於ては（六月廿九日）

日野たい子　田畑たか子　田村たみ子　竹内せき子

○京濱婦人大祈禱會の由來

京濱婦人大祈禱會の由來等につきて、度々質問を寄せらるゝ方々あるより、頃日社員の一人が、同會創設の當初より、今日まで引續き委員の一人にてあらるゝ、矢島揖子女史を訪問して、同會の來由等に就きて聽き得たる處かくの如し。

明治十六年は我國の基督教會が、非常の進歩運動をなし、頗る信者の數を增加せし年なりきして、其五月には淺草井生村樓にて全國基督同盟會開設の盛事さへあり、有志の信徒は其教派の如何を問はで、東より西より來集したる中には、多くの婦人達もありけるが、其婦人中にて、かく每日會議の傍聽をなしつゝあるのみにては、なほ物足らはぬ心地せらるゝに、いま各國より婦人信徒の出京せるを幸に、婦人大祈禱會を開きては如何やと發意するものあり、志を同ふするもの亦勘からざりしより、なほ書を發し、使を馳せて同志を語らひ、かくて其頃築地なりし啓蒙學校の講堂にて、大祈禱會を開きたり、是ぞ抑も京濱婦人大祈禱會なるものゝ起因なりける。

當年の會合にて、此會限りにて婦人大祈禱會なるものを閉まんも殘念なりきの說あり、さりとて全國の婦人を年々集めんとは困難なるが幸に京濱間は汽車の便もあることなれば、年二回即ち五月最初の土曜日には横濱にて、十月最後の土曜日は東京にて、京濱間の婦人大祈禱會を開くことにすべしとの決議ありて、西洋婦人三名日本婦人三名都合六名の委員を擧げて、每年欠かしなく此會を開けり。尤も横濱にて開設せらるゝ順番の時には、其地在の委員は、東京在のものに打合することなく勝手に準備をなし、東京順番の時は東京委員の勝手に準備するやうになれりといふ大祈禱會開かるゝ度每に會するものは平均三四百名なりき。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本年京都にて開かれたる全國婦人大祈禱會にては、　皇后陛下に聖書献納の事を決議せしよしなるが、此事は既に京濱婦人大祈禱會が、明治廿二年五月に一應試みたる事なりしとぞ。明治廿一年には新舊約全書翻譯全く成り、一部の書となりて出版せられて、信者等の滿足は實ならざりしが、加ふるに廿二年には憲法發布せられて、臣民信教の自由を得たるものからに、當年の基督教會は活氣頗る溂々として京濱婦人大祈禱會にても、事情かくなるからには、今は皇后陛下に聖書一卷を奉獻して、乙夜の御覽を賜はらんことを乞ふも差支へなかるべしとありて、ミス、ヤンゲメンの發議より其運びをなし、寄附金を募集して頗る美麗なる聖書一卷を調へつ。さて其献納の手續として婦人諸氏は色々奔走し、當時皇后宮職の一員なりし三宮義胤氏夫人は外國婦人にてあれば、聖書を受取らるゝに便宜なかる可ければ、此夫人より三宮氏に紹介を得て、献納の運を得んとしたるも成らず、更に當時の東京府知事高崎五六氏に謀りし處、知事氏はいとやす／＼と受合はれ、其手續から相談ありしより、婦人達の喜悦斜ならず、　皇后陛下の御誕辰日にていまに五月廿八日を幸に、高崎知事の手を經て正式に聖書献納の事を計ひたり。婦人諸氏は熱意やうやく遂げて、至誠を籠めたる聖書の一卷は、九重の雲井深く上ぼせられて、　皇后陛下時々乙夜の御覽を辱ふせらるゝこととなれるぞとて、頗る喜びゐたりき。

然るに其後セイス女史米國より來朝ありて、貴顯紳士の間に出入して、傳道を試みられし時、皇后陛下に聖書献納を思ひ立ち、種々手數を盡くして土方宮内大臣まで願ひ出でたるに。御届け置き旨の諭達ありたりといふ。されど嘗に京濱婦人祈禱會の献納せし聖書も或は未だ九重の深宮を見ることなくし、宮内省の倉庫に納められあるにてはなきか。

○裁縫及家事試驗問題

二科の教師試驗問題、左の如し、

甲。文部省家事教員試驗問題

(一)衣服の保存に關する心得を詳述せよ、

(二)食物調理の目的を說き其方法の重なるものに就きて得失を擧ぐ可し、

(三)居住す可き土地の選擇に就きて注意す可き點を列記す可し、

(四)出入金の一覽表を作る方法並に理由を記述す可し、

(五)次の諸項を日記帳に記入す可し、

四月十九日	松の鉢植但鉢とも	金一圓七十錢
仝二十一日	留守の車夫への心附	金二十錢
仝二十二日	湯錢	金七錢三厘
仝二十五日	古障子賣却代	金一圓十五錢
仝二十六日	菓子一折但某氏への進物	金一圓
仝二十七日	袴仕立代	金三十五錢
仝二十八日	遺失金	金五十錢
仝二十八日	石油一罐	金九十七錢
仝二十九日	家族一同王子行に付費用	金四圓三十錢
仝二十九日	生命保險會社へ拂込金	金一圓五十二錢

右五題午前八時より正午迄

(六)胎教の必要なる所以及び之に關する心得を問ふ、

(七)幼兒の體育上家庭に於て注意すべき諸件を列擧して其梗概を說く可し、

右二題午後一時より仝三時迄

裁縫科

(一)裁縫を教授するに雛形を用ゐると實物を用ゆるとの可否を問ふ、

(二)巾一尺、丈二丈四尺八寸二分にて入布當ひ馬乘袴の裁縫積り方を記し且つ出來上り寸法を明細に記す可し、

(三)巾九寸五分、丈五丈七尺(國綿物)、

右の布にて十二才六才の女兒給衣一枚つゝ及十才の女兒羽織衣一枚を裁合せんに、其積り方如何、

但し給には相當の腰上げを見積る可し、

(四)男物單羽織中身を縫ふ可し、

(五)二尺巾金巾三尺にて子供洋服の極單易なるものを裁縫す可し、

但し雛形なり縫ひかけをミシンにて縫ひ其他は假縫のまゝ、

乙。東京府裁縫教員試驗問題

(一)片面染巾一尺一寸長サ四丈二尺八寸を以て本裁女服裁斷し付及三ツ身被布の裁方圖丼に寸法等を記せよ、

(二)本裁男袷羽織を裁に袖丈一尺四寸身の丈二尺六寸できなさんとする表地の巾一尺二寸長サ二丈〇四寸なるときは其裏地幾尺要するや、

但し裁方圖及寸法を記すべし、

(三)巾二尺長サ五尺の布を以て胸當なしのシャツの裁方を記せよ、

以上二時間中になすべし、

縫物題

(四)四ツ身綿入二分の一の中身を縫ふべし、

但し午前八時より十一時迄

(五)單衣重ねの右袖を縫ふべし、

但し午後一時より三時迄に

丙。及第者

因みに云く、試驗及第者左の如し、

東京府家事科正教員		宮川さく子	同准教員	稻葉ふゆ子、棚谷まさ子。
同	裁縫科正教員	原　あい子		
同	准教員	森井てい子	上野とし子	中西　繁枝子
		內山頴子	松波千代子	今立　きぬ子
		伊東さこ子	乘附てん子	伊東　さは子
		大森五百子	柳內さこ子	坂入　作子
		江本いさ子	玉置すみ子	伊東千年鶴子
		小口ひし子	藤波よれ子	重松小篠代子
		三石春子	山田のり子	松野　しづ子

右二十五名の內十九名は渡邊辰五郎氏の門下生のよし。

文部省家事科教員　高橋るゐ子　山科みえ子　外一名

內二名は渡邊氏の門下生のよし。

○同志社女學校會計

同志社廿七年度報告中、女學に關するものの大体、左の如し、

寄附金	本年度現收入	內支拂	殘存高
女學校資本金	五三七、一一八		五三七、一一八
女學校敎場移轉費	一一四、七六〇	八八、一七〇	二六、九九〇
女學校新島文庫	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	
女學校修繕費	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	
女學校教員俸給	六四、〇〇〇	六四、〇〇〇	
女學校經費	三六〇、〇〇〇	三六〇、〇〇〇	

	資本	敷地	建物	圖書	器械	標本	什器
女學校 女學校新島文庫	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
京都看病婦學校 病院		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]

女學校資本現金高　五四七、四一八

收入内譯		支出内譯	
廿四年度安中某夫人寄附金	10,000	第一國立銀行定期預金二口	[illegible]
前年度京都宇佐美氏寄附金	三〇〇		
米國モリス夫人寄附金弗一〇〇弗	一九六、〇七八		
在米土倉政子周旋寄附金弗二三弗	四二、九九〇		
京都中村湯淺兩氏各〇〇外各有志四十一名寄附金	二九八、〇五〇		

○監督教派の諸婦人會

◎聖公會京都傳道區婦人會記事　一千八百九十三年五月米國聖公會社名譽書記ツウヰンク夫人渡來の節川口居留地二十七番館に於てアール選ペーマ讃フベル兩の斡旋により大阪に在る聖約翰聖保羅及川口の三教會の各婦人會を與連合して婦人會を開けり。其際ツウヰンク夫人の勸告により萬國傳道補助會の爲め三婦人會各應分の勸をなし三年に一度出金することを決議せり。乃ち本年は第三年に相當するを以て目下マキム監督の來阪を幸にページ教師の盡力により此回は規模を稍擴張し同教師の宅に於て聖公會京都傳道區婦人會を開くことを得たりき

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て當日の景況及各婦人會事業の報告あり。即ち五月十八日午後二時大坂川口居留地七番ベーツ教師宅に於て開かれ監督マキム氏議長の席に就く會するもの七十名。演說監督マキム氏は、萬國に在る婦人と共に來十月亞米利加に於て開會すべき聖公會總會に獻ぜんため京都傳道區に於て集めたる寄附金高報告（百五十三圓三十錢右寄附金は之を監督に依托す）。日本婦人の名を以て米國婦人に贈呈する書辭草案（林うた子女史朗讀）、京都傳道區に於て婦人總會を組織するの可否（可決）、書記指名（榎内晴子女）、其會期を每年とするの可否（可決）、婦人に關する新事業（意見を發するものなし因りて監督は慈善事業に盡力せよと勸めらる）等の議事あり。

◎大坂川口聖基督教會　本會は明治廿五年六月該教會に屬する婦人信徒を以て組織す每月一回集會を開き祈禱感話奬勵等をなす又此際未信徒を誘導し傳道に盡力す且つ將來教會は自給の基礎を築き尙は疾病貧困のものを補助せんため每月株金を醵集す廿六年五月以降萬國婦人傳道補助會へ本會醵金の幾分を寄附することゝなせり。

◎大坂聖保羅教會レブタ婦人會　明治二十三年十二月該教會婦人信徒を以て組織す每月一回集會を開き祈禱奬勵及會務を評議す會員は各自家に於て每朝祈禱の際レブタとして些少づゝの金を主に獻げ他日禮拜堂聖咸の費に備ふ又外國傳道補助會へも出金す。

◎大坂聖約翰教會婦人會　該教會婦人信徒及贊成員を以て組織す每月一回集會し又集會の都度來信者を誘導し來り福音を聞かしむ大坂救兒院及婦人手藝會は本會の管理する所に係る月々醵集する金を以て中は救兒院の爲め中は教會及萬國婦人傳道補助會に寄附す。

◎大坂聖約翰婦人會附屬大坂救兒院　西曆一千八百八十九年十一月創立せるもの開業無名の孤兒貧兒を救護教育し居れり年齡十二に至れば其資性に應じたる職業に就かしむ或は偶進んで高等教育を受けしむるもあり若し又相當の家より所望さるゝ時には養子女に遣はすこともあり創立以來本年迄救兒四十四人退院二十一人現在院二十三人、本院の維持は約翰婦人會の寄附と內外慈善家の義捐によるものにして經費一ヶ年五百圓餘を要す目下殆んど其の三分の五は米國慈善家の寄贈に係る。

◎同附屬婦人手藝會　本年二月未信者を主に導くの目的を以て設けたるものにして一週一度有志の女子を集め女子必須の手藝を教授し其月謝は救兒院に寄附す教師は聖約翰婦人會の一人にして特志を以て教授せられ又折々教師を聘して聖書の講話を乞ふ目下集る者三十名內外。

◎大坂惠婦人會　明治二十四年十一月創めて大坂に在る聖公會役者の妻女及び婦人傳道者を以て組織す每月一回集會を開き祈禱をなし且つ聖書を研究す會員より月々醵集する所の金を以て數の蠟燭および大阪にある三個の聖公會の各集會時間を記せしものを印刷して各三教會及附屬講義所等に寄附し來聽の未信者に予ふ本會創立以來右印刷紙數既でに二萬九千部に達す本年三月キリスト教書類若干部を日清戰爭負傷者に寄送せり。

◎博愛社　明治廿三年一月故小橋勝之助氏感ずるところありて自己の身體財產を主に獻げ無告の孤兒に普通學課の智識と實業とを授けんが爲め設立せしものに係る勝之助氏歿眠後親戚の迫害を蒙り資產を悉く奪はれければ將來唯天父に依賴し孤兒殘らず晝は農事を營み夜は學事に勉め將來獨立の良民たらんことを祈りつゝ働き居れり目下孤兒十三名女兒二名あり勝之助氏の弟なる實之助氏を補佐して林うた女之れを撫育せり經費一ヶ月三十五圓餘を要す實業によりて獲たるところは經費の三分の一に過ぎず他は四方有志の寄送によりて維持せり。

◎紀州橋本私立女子技藝學校　本校は女子の德性を涵養し且つ授くるに普通技藝を以てす目的とするところは將來女子をして其本分を完ふせしむるに在り入學年齡は十三年以上にして學期は三年を以て卒業するものとす明治二十五年創立以來非常の迫害ありしも入校せしもの今日に七十餘名に達す設立以來本年まで收入金七十六圓餘にして支出百三十七圓差引六十一圓不足せり。

◎京都五條聖公會婦人會　本會は明治廿六年一月創立す主とするところは未信者を誘導するにあり故に每週一回編物會を開き其際主の聖語に基き修身談話をなす集會者は目下數名に過ぎず又會費として醵集する金子を積み置き慈善事業の用に供す。

◎奈良婦人一厘會　明治二十三年五月奈良基督教會姉妹の設立に係る隔週一度集會を開き信仰上の感話及祈禱をなす會員は一日金一厘づゝを貯へ置き日本聖公會傳道會社へ寄附し時に或は慈善事業を補助するを目的とす。（以上區會書記榎内晴子寄書）（教界評論第四十二號に據る）

○朝鮮釜山通信

本川源之助

朝鮮人は皆々白衣を着け、婦人は如何なる重き物にても頭上にいたゞき、工合能く步み候有樣、中々巧みなり。夫が爲めにも可有之哉身軀は皆直立し今日本人の如き腰の撓み候者は壹人も不見當候。住居は恰も日本の豚小屋位の者にて、大抵四疊半位の處に（土間の上へ油紙を張りたる處にて上等の分なり）少なきは四五人、多きは八九人以上住み居候。豚も犬も同居の有樣にて、不潔いはん方なく、氣發など申す者はなきかと疑はるゝ程にて、日本人のいふが儘に働き、云ふが儘に與へられ、滿足致候者も不滿足な中樣の時は忽ち叱り附けらるゝ事に御坐候。」女子の教育抔とは、韓人には思ひも依らぬ事にて、居留地西町といふ處の日本人の小學校に、韓人の子弟の入學者を見るに、大抵男兒なり又ベアード氏等設立の韓人小學校にも、男兒而已居られ未婚女は大概家內の働き而已に日を送り外出致す事は稀に御坐候。中以上の商人及び農夫は大抵三四人位の妾を貯へ居候。是れは正妻と同居致居る者も有之候得共大概は妾宅を構へ居候釜山より三里

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の處に東萊と申す處有之候。此處の商人は釜山浦の間に三人の妾宅を設けなく者有之由。其方法は、最初拾圓位にて家を造り與へ(韓人の家にては上等の分なり)五圓位の元手金を與へて、商業を營ましむれば、婦人の勤勉なる結構に豐なる生活を爲し居候。夫故旦那は方々一文いらずに泊りあるく由にて、妾を置て却て有福に相成者も有之哉に聞及び候。府使と申すは、日本の府知事位に御座候得共、彼等の行列には必ず四五名の妾(即ち官妓)を列に加へ居候。此妾は代々門閥家より出す由にて、官妓を出す家と申候得ば人も尊む由なり。如何にして此等賤婦人を導き教ふべき哉との問題は、宗教家に限らず、少しく正義の考ある者は、忽ち胸中に湧出すべき筈なるに、近頃耳に致候事は或日本人の出願にて、居留地を去る五六町の處に賤婦人の娼妓屋を開業なすの準備整ひ、女は京城近邊にて買入れ來るとのとなり、慨くべき事ならず哉。

日本婦人は船便毎に乘込み來り、中には或誘拐者の如きは、十四五名の賣淫女を和船にて長崎より密航せしめ、釜山より浦鹽に向け渡航せんと企てしを、船底にて悉く見附けられ、女子は直ちに退韓を命ぜられ、誘拐者は今以て日本居留地警察署に拘引致しある由なり。現に小生の乘込みし船にも、三名の日本人は七八名の女と同乘致し、其内の壹人を、水夫などかたらひ船底にかくさしめ、長崎出帆後二時間程を經て、人の注意を引かぬ樣に甲板に連れ來れり。彼等は平氣なり。聞に行へ抔と觸り言を申居候ひし。領事館警察署は注意能く行き屆き、大抵は見破る由なり。又釜山居留地にても怪敷奴は探偵に探偵を盡し愈々事實日本の体面を汚すの見込附きし者は、續々退韓を命ずる由。是れは餘程きゝめある方法にて、夫れが爲め餘程靜謐に御坐候、西洋人は四五名住居致居、熱心に韓語を學び傳道致居候。ペヤアード氏は餘程永く在韓との事にて韓語も一番巧なりと聞き及び候。

七月三日記す

◎日本女子體格平均表

左表は印東玄得氏が明治生命保險株式會社被保人中年齡十五歲以上六十歲以下の健康女子三千人に就て調査せられたる女子體格統計表(國家醫學會雜誌九十八號附錄)中より每五年の平均數を抄出せるものなり。

年齡	人員	身長	體重	胸廓の周圍(深息時乳線部)	胸廓縮張の差	胸廓の前後徑(乳線部)	胸廓の横徑(乳線部)	活量	呼吸の數(一分時)	脈搏の數(一分時)	腹圍(臍部)
十五歲	一九	一四三、〇五	四四四六八	七七、八九	六、二四	一七、一八	二三、三三	二二一〇	二〇、五七	八二、六八	六七、〇五
自十六歲至二十歲	一九〇	一四七、六三	四六八〇〇	七九、八九	五、九六	一七、六六	二三、二一	二二〇七	二〇、二七	七八、七八	六七、五五
自廿一歲至廿五歲	三六〇	一四六、六四	四六三三一	八〇、四三	五、九二	一七、七六	二三、七〇	二二五五	一九、九二	七八、〇二	六八、五五
自廿六歲至三十歲	三七四	一四七、〇八	四六二九四	八〇、九一	五、九九	一八、一八	二五、九七	二三七五	一九、七一	七六、八八	六九、五五
自卅一歲至卅五歲	三八二	一四七、〇六	四六七四四	八一、一三	五、九五	一五、四〇	二四、〇九	二三六九	一九、六三	七六、五七	六九、九八
自卅六歲至四十歲	四〇九	一四六、九八	四七一九五	八二、一五	五、八七	一八、四五	二四、二四	二三四〇	一九、四三	七六、四七	七二、一四
自四一歲至四五歲	四一〇	一四七、五六	四七五一六	八二、一七	五、八四	一八、一七	二四、四〇	二三七一	一九、三三	七五、九八	七二、五一
自四六歲至五十歲	三五八	一四六、三四	四六七六〇	八二、〇一	五、七五	一八、六一	二四、三三	二三五八	一八、九八	七四、九五	七三、〇四
自五一歲至五五歲	三〇五	一四六、一三	四四七六四	八一、三八	五、八一	一八、一五	二四、一五	二三五一	一九、二八	七五、八七	七二、五五
自五六歲至六十歲	一九三	一四五、〇六	四四五四四	八一、二四	五、六五	一八、三八	二三、九一	二一六六	一九、二五	七四、八七	七二、七六
總計平均	三〇〇〇	一四六、三三	四六一三八	八〇、九二	五、八八	一八、一五	二三、八五	二三八四	一九、六二	七七、〇五	七〇、二〇

(備考)體重は瓦爾瑪。身長、胸廓の周圍、縮張及前後徑、横徑、腹圍等は仙迷。活量は立方仙迷を以て一位とせり。又體重及活量の項は一位以下の少數を除去せりそは煩を避けんが爲めなり。

◎新著　曩に閨秀の有志が共同義捐して、三萬一千册の書籍を出版し、ことしの博覽會を機として配布したる盛なる事業の會計を聞くに、寄附金總計百七十三圓五十八錢三厘、此內、出版費百三十一圓、運賃其他雜費代等六圓七十錢に過ぎず、殘金を差引き、尚ほ三十圓ほどの殘金ありしとぞ。

◎神戸婦人報公會　は傷兵救濟の事業に一方ならず盡力せしが、去月二十五日、凱歌を奏して、神戸商業會議所にて解散の式を行ひたり。其終の美、うるはしき哉。

◎速記者佃氏　は早く女子速記生の養成に力を盡せし人也。近頃ろ、富士見町五丁目九番地なる同氏事務所の公告に曰へらく、女子速記者の需要は本事務所最に大に其必要を感じ、今や卒業生徒の者數名を得たり殊に今女學校の卒業式女子會合の演説速記もよくは男子に遜らざるが故に集會の如き舉へに本事務所の特色として世の依賴に應ぜんとすと。

◎女子師範學校の養蠶　熊本縣女子師範學校長中村揆平氏は兼て同縣女子教育に於き頗る研究を爲し居りしが昨年始めて試みに同校女子師範生徒をして養蠶實習を爲さしめたりしに頗る好成績を得たりしを以て本年も亦之が實習を爲さしめたりと云ふ今其概況を聞くに掃立は四月六日にして六月十二日に至り盡く上簇し其繭量は七斗八分なり品種は新撰及青熟の二種にして種は凡て郡伊同氏に於て製造せるものに係る、掃立より上簇に至る迄要せる給桑量は五百〇九貫百二十五匁にして繭量一石三斗五升、同切繭一斗四升五合、汚繭七升、薄繭一斗五升の收穫あり、實習は女子師範寄宿舍の一部を以て之に充て三十六名の生徒を六分して六組とし各々受持を定め掃立に至る迄は學科授業の前後に於て生徒をして自ら飼育を爲さしめたり、蠶室は同校農業講習場內にあるものを使用せり、農業講習場は同校舍を離る凡三町餘の同縣飽田河岸にあり、飼育は同校教諭同縣農學士之を指導監督し實習の傍ら飼育に關する法則、蠶兒の發育、繭の鑑定法、蠶種の選別、蠶種製造等に關する說明を爲したりしに生徒は皆な喜んで之を聽きたり將來とも好成績を得るの望みありと又是れ教育界に一生面を拓きたる事と云ひつべし（日本七月十三日）

◎高等女學校設立の問題（茨城縣通信）　現任文部大臣が女子教育の普及に熱心なりとの事が同縣へて急に思ひ出したるものか或は又た自然の勢ひに促されたるものか茨城縣教育界の中樞とも言ふべき茨城教育協會に於ては過日常設委員の會合に際し高等女學校設立を高崎縣知事に建議するの件を議定し去る廿一日より縣會議事堂の內に開かれたる總集會に之を提出して討議に附せし由なるが聞は縣知事よりも之と同事に四五件の諮問を附して高等女學校設立の可否を同會に諮問したれば是事も併せて能く討究審議する事なるべく熱心なる教育家は勿論、一般の輿論も其設立には敢て異存なきが如しとなり（國民新聞七月廿三日）

◎大阪の特色　江戸つ子の目から見て、大阪の特色として數ふべきものを列舉せしうち、左の件々あり。（商業資料）

美人の皮膚のこまかなる事	（其美人に乏し）
美人の口もとにしまりなき事	（齒をむき出す）
下女に案外美人の多き事	（東京の醜に比して）
下女にアンカを抱かす事	（奉公人の氣樂さ）
女の髷の髱の高き事	（東京は髷低くし）
野者に金持ちのある事	（金にほれて男にほれず）
婦人の肩寄れかけ少き事	（東京はダテ前垂を締く）
芝居の中賣は女に限る事	（東京は若ひ衆のみ）
藝者にハナを遣る者少き事	（其代り藝者も贔屓に偏る）
妻君の買物に行くを見ざる事	（これが眞に塊壌）

◎高田耕安氏の看護法講演　去年十二月九日より本鄕會堂にて開ふされし同講演は去月廿三日を以て完結せり。會員總數百十四名、毎會出席平均五十名。人曰く、高田氏は、寒風由雪の日も曾て還到せられしとなく、最も懇切に演說せられたりと。

◎同都の女中に貯蓄心多し　近頃東京市內に於て、銀行に貯金あづけするものの多少を調べし人の言ふに、

第一　商家の子弟　　第二　鄕里地方より出し女中
第三　奏任以下の官吏　　第四　一般の職工
第五　學生の學費

右の順序なりとぞ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●婦人科小兒科專門●

赤坂區丹後町一番地
豐川稻荷側安藤邸角

女醫 大村のふ

明治女學校廣告

明治女學校は、民間同志者の協力により、明治十八年に於て創立せられ爾來たゞ同志者の精神によりて維持せられ、現在及將來之を變ゆることなし。教育の道に於ては、特に信ずる所のものあり。必らずや之に殉して吾校の使命を盡さんことを欲す。世上の父兄もし信じて其妹女を托せらるゝことあらば、吾等は歡んで之が教育の任を盡さん。

校則

第一條 本校の課程を分ちて普通科及高等科となす

第二條 學年は每年四月下旬を始とし翌年四月上旬を終とし一學年を分ちて三期となす如左

第一期 四月廿一日より七月二十日迄
第二期 九月十日より十二月廿五日迄
第三期 一月十日より四月五日迄

第三條 授業時間は每日大凡五六時間にして一學時を五十分と定む

第四條 本校休日は、日曜日、月曜日、國祭日、皇后陛下御誕辰、本校紀念日、春季、冬夏季の休業とす

第五條 武道の一科は隨意科とし心術修養の目的を以て有志者をして修學せしむ

入退學

第一條 入學は每學年の初め之を許す但し相當の學力ありて現在級と並進し得るものは何時にても入學を許す

第二條 入學志願者は其の志願の級に對する入學試驗を受く可し但し小學高等科三年卒業のものは無試驗にて普通科第一年に編入を許し同全科卒業のものは同上普通科第二年に編入す

第三條 入學の者は當市內在住の父兄親戚若しくは身元確かなる知人を以て保證人となすべし

學科

普通科

(一)普通科は邦語を以て婦人に必用なる普通實用の學藝を授け普通科卒業の上更に高等の教育を受けんことを欲するものゝ爲めに高等科を設け又普通科、高等科の規定の全學科目を修むる能はざる事情あるものゝためには別に撰科及專修科を置く

(二)普通科の修業年限を四年とし高等科を二年とす

(三)隨意科として英學科を設け專修若しくは兼修するを得せしむ

(四)直ちに普通科に入りがたき者の爲め臨時に補充科を設くることあるべし

高等科

(一)高等科は當分文學部のみの設置にとゞむ

(二)高等科文學部に於ては專ら和漢英の三學を授く

(三)高等科に於ては主として學生の獨學啓發を旨とすといへども教師直ちに授業の時間も亦設けらるべし即ち和漢學ともに每週各三時間以上英學每週十時間以上とす

學費

一 入學の際束脩として金一圓を納む可し
一 [illegible]每月五日迄に授業料を左の割にて納む可し
普通科 [illegible]
高等科 同 [illegible]錢

撰科 正科同額

專修科 英學(壹圓) 國文(半圓) 繪畫(半圓) 裁縫(半圓) 女禮(半圓) 音樂(琴三十錢、オルガン一圓、ヴヰオリン二圓) 武道(三十錢)

但し正科若くは撰科生にして專修科内の科目又は隨意科を兼修するものは一學期毎に金二十錢を納むべし
尤も音樂の兼修は其專修科と同額の月謝を納むべし

(三)二ヶ月以上欠席するものは最初の一ヶ月の授業料を納む可し

(四)寄宿生は每月食料として金三圓薪炭油及其他雜費として同八十錢を每月五日迄に納む可し(但時宜により增減あるべし)

東京麹町區下六番町六番地
明治女學校

新渡戸稻造
笠井修子 合著

建國美談

上下二冊 合五十錢

米國費府「ロバーツ」婦人嘗テ「非リアムペン」氏ノ小傳ヲ記シ家庭教訓ノ資ト爲サント欲シ友人「ハーツホン」翁ニ就テ斧正ヲ求ム翁昨夏其稿ヲ携ヘ予ヲ北海ニ訪ヒ小廬ニ寓シ[illegible]ヲ加ヘ[illegible]カズ日ク好著書獨リ一門ノ子弟ニ私スルヨリハ之ヲ世ニ公ニセバ我米人ヲ益スルノミナラズ亦以東洋ノ子弟ヲ益スルニ足ラント乃チ慫慂シテ上木セシム頃日東京笠井修子此書ヲ譯シ予ニ校定ヲ請フ披テ之ヲ閲スレバ則チ善ク原文ノ意義ヲ[illegible]シ而[illegible]合、ニ[illegible]做ス[illegible]ノ體附ヨリ然ラサルヲ得ズト[illegible]文理ノ断簡、記事ノ詳略、邦文ヲ以テ之ヲ覘レバ隔靴搔痒ノ悔ナキニアラズ乃チ未傳ニ據ヲ取捨シ勉メテ行文ヲ平易ニシ頗ル面目ヲ改メ[illegible]年少ノ子弟ヲシテ讀ミ易ク解シ易カラシム但篇章ノ分合ハ一ニ作稿ニ依ル嗚呼翁ハ海外ノ一舊知ナリ而シテ二子亦一而ノ議アリ其原稿ハ則チ翁之ヲ小婦ニ關定シ譯者ハ則チ予之ヲ潤色ス而シテ其事蹟ハ則チ平素[illegible]集措ク能ハサルノ偉人傑士ナリ一讀ノ下千里ノ適女ヲ會シ關世ノ英雄ニ接スルノ想アリ若シ夫レ氏ノ宗教ニ關スル功績ニ予ドハ嚮ニ著アリ世ニ行ハル此書ノ如キハ其業ノ小部分ヲ掛緣スルニ過キズ讀者全備ヲ此書ニ求ムル勿レ稿成ルニ及テ其顛末ヲ記シ卷首ニ辨ス

新渡戸稻造記ス

發賣所 東京麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

日本宗教家評論之評論

日本宗教

THE REVIEW
OF
RELIGIOUS REVIEWS.

第貳號豫告

佛教の殺生戒（加藤弘之）○西郷先生の宗教（西郷隆盛信者者）○禪の威（元良勇次郎）○佛教學說（釋雲照）○二祖惠可斷臂（高津柏樹）○山崎闇齋の神道（戸川安宅）等ヲ掲載スベシ

日本宗教第壹號目錄

發刊の辭

論說

邦人の宗教心　三宅雪嶺

泥舟先生に禪道を聽く　巖本善治

所懷

史傳

山崎闇齋　戸川殘花

支那の回々教　青柳猛

雜錄

希臘教育の組織　小西増太郎

和歌に於ける宗教　湯谷紫苑

思潮

本願寺の聖人（反省雜誌）

日本のユニテリアン（宗教）

佛教の因果應報非眞理を（加藤弘之氏）

神道者大道（四夜の灯）

佛教の哲學及信仰（佛教）

英國の國粹派及西洋派（心海）

成田雜感（加藤[illegible]氏）

海江田子爵に答ふ（釋雲照氏）

ホンブツ、ピクト（植村正久氏）

通俗禪者用書（禪宗）

日本弘道會（日本弘道會記）

物質主義の宗教（姉崎正治氏）

基督教と國文（早稻田文學）

佛教歷史研究法（鷲尾順敬）

精神の高雅、心志の獨立（植村正久氏）

即心即佛の實修

佛德及ひ公德（渡瀨常吉氏）

万象是佛、是大乘（四依一六氏）

古領地傳道一策（教界評論）

美術と宗教（松本源太郎氏）

大師堂建立因緣（日本一）

宗教の物質心靈二主義（姉崎正治氏）

文界近時の大勢（早稻田文學）

人生三誠（板垣退助氏）

正心遵守進步（西村茂樹氏）

大乘非佛說（佛教）

講壇の牧師（海老名彈正氏）

宗教組織論

宗教の必要（内村鑑三氏）

西村醉處と永井悟由

大乘非佛論の一新意義（四依一六氏）

時宗元述を防ぐの氣力

新版圖內の布教（野口勝一氏）

默想の妙論（東京基督教）

佛教家の急務（哲學雜誌）

朝鮮傳道

朝鮮各宗便覽（教育時論）

不惡口戒（釋雲照氏）

軍隊布教

往生の生因（日本一）

不言即實行（宮川經輝氏）

十善戒（[illegible]氏）

宗教的東方問題（女學雜誌）

宗教とは何ぞや（丸山通一氏）

宗教的熱心と自由討究（六合雜誌）

ザラツストラ教の教理（木村鷹太郎氏）

祓除の德（惟一）

葬祭と佛教（法の母）

説法を禁む（法王）

宗教家の勇氣（澤柳政太郎氏）

新刊雜誌紹介

十善寶窟○三寶叢誌○佛教史林○佛教○禪宗○四明餘霞○密嚴教報○教友雜誌○日本一○眞教○反省雜誌○正法輪○傳道新誌○護法○佛教通俗新聞○禪學○彌陀の光○能仁新報○法の母○御國の母○六合雜誌○眞理○宗教○宇宙神教○心海○正教新報○基督教新聞○福音新報○護教 統一○其他數十種

新著紹介

佛教管見

時流

日本佛教界　日本基督教界　維新以後各宗教運動　朝鮮之佛宗教界○歐米宗教界

日本各宗派管長一覽表

基督教宗派一覽表

日本宗教新聞雜誌名稱、宗派、發兌日、定價、發行所明細一覽表

附錄

佛教箴言　釋雲照律師

天然の新宗教　トスムダル

定價 一册七錢五厘（半年、四十錢（一年、七十五錢○但郵稅（僻陬見込の所の）の仁は郵券八錢封入申込あれ○郵券代用一割增○爲替は東京麴町郵便局宛

發賣所　東京麴町區下六番町六番地　日本宗教社

日本宗教

注意

本誌第一號記載の事項は、出版法第二條の範圍外に涉るものと認められ、去る十八日内務大臣より自今出版法に依りて出版することを差止められたれば、第二號より新聞紙條例に隨ひ來月十日に發兌すべし

本誌第壹號に對する批評の一二

◎「日本」曰く永く發行精神の公平なるを保ち耶蘇も佛教も讀者の翫味に任せば宗教雜誌たるの本色に負かず◎「紛人日報」曰く其意や能く日本宗教の輿論を一目瞭然たらしめんと歸するもの丶如し是亦與個の讀むべき良雜誌◎「東京朝日新聞」曰く世の滔々として睨他に流るゝものとは同日にして論すべからず斯くありてこそ宗教の精美盡し得らるべし◎「紀伊毎日新聞」曰く今や社會の人心は新宗教を思ふの時に値す此時に方つて此冊子の發刊を見る亦機を得たりと云ふべし◎「岐阜日々新聞」曰く本邦各宗教の消息を網羅する所多とすべし◎「和歌山新報」曰く苟も宗教家には坐右欠くべからざる好雜誌なり◎「峽中日報」曰く一讀以て日本宗教界の綱目を覺知するに足らん◎「精神」曰く花々しき文壇の出陣といふべし◎「東北新報」曰く廣く宗教の進歩を期する大雜誌にて諸宗諸派を網羅して剩さず近時出色の好雜誌◎「毎日新聞」曰く普く各宗教界の時論と大勢とを報道し各宗各派の諸先進が公平なる宗教意見を紹介するとは正しく我邦の比較宗教學上に好材料を與ふるものとして吾人は之を歡迎するものなり……日本宗教界の消息を居ながら辨知せしむる者と云ふべし◎「近江新報」曰く宗に僻せず派に偏せず總ての宗教の精美を取るものなれば佛教基督教ユニテリアン等の諸教義に關する論評亦從て多し◎「東北日報」曰く福露百花皆な是れ宗教法界の花叢の美收めて此冊中に在り花明柳暗自から善惡邪正を人怡するに任らは又國家の爲に裨益尠少にあらざるべし◎「山梨日々新聞」曰く其材料を撰擇する精にして豐かなる體裁の整然たる多く匹儔を見ず日本宗教界評論の評論たるに背かずと謂ふべし◎「扶桑新聞」曰く初號ながら材料の精美なる體裁の整頓せる優に此種の雜誌界に一旗幟を樹へせり「思潮」欄内頗る面白し恐らくは宗教家必讀の料ならん◎「開化新聞」曰く中正不偏各宗派の精美を探明せんとするもの記事該博體裁整正其思想界の燈明臺となり求道者の羅針盤となるは期して俟つべし◎「明教新誌」曰く一二不完全のところなきにしもあらねど正大公明その宣言に背かずと云ふべし◎「基督教新聞」曰く宗教雜誌界に一頭角を顯すものと云ふべし此雜誌の成長と發達とは何宗の誰しも望む所なるべく兎に角現今日本人の人氣に投合したる好雜誌なり「日本人」曰く善い哉「日本宗教」の理想や、余輩は此種の雜誌の我國に無かるべからずして而も今日迄無かりしを惜みたるものなるが今而るに同感の士ありて從來の闕漏を補ふに至る、余輩は此點に於きて「日本宗教」の發程を喜はずんばあらず●其他數十種の批評を賜はりたれども詳しくは來月發兌の本誌第二號に載す

日本宗教一部金七錢九厘〇六部前金四十錢〇十二部前金七十五錢（但し第一號は賣價八錢郵稅壹錢、見本は郵券八錢を要す）

日本宗教廣告料五號字二十四字詰一行金拾錢

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇本社に關する一切の文書、注文等は必ず左の發賣所に宛て御遣はし被下度候（爲替振込所は「麴町電信郵便支局」爲替受取人は「日本宗教發賣所」と明記されたし）

東京市麴町區下六番町六番地
第七號舍

發賣所　日本宗教發賣所

(明治廿九年三月十五日遞信省認可)

女學雜誌社出版書籍

書名	著者	一部代金	郵税
(再版)小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵税八錢
(六版)百人一首講義	鈴木弘恭君講	同廿五錢	同四錢
(信神孝父)腓立比物語	櫻井成明君譯	同廿八錢	同六錢
(寄さき)猫と鼠	女學雜誌社編	同四錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治君著	同八錢	同
木村鐙子小傳	同前	同八錢	同
公娼可滅	同前	同三錢	同
教育講義	同前	同七錢	同
日本女學	同前	同四錢	同
(再版)文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十二錢	同四錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同八錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同十二錢	同四錢
俳諧史傳	小此木信一郎 布川孫市 兩君同著	同廿七錢	同
善惡の岐	中島とし子著	同十七錢	同
廢娼演説	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同三錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同四錢	同
兒育草	同	同十二錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同二錢	同
戯曲 桂吾郎	阿波鳴門左衛門著	同十錢	同
高橋傳五郎	巖本善治君編輯	同五錢	同
偉人物	山月子稿	同二錢	同

發行所 女學雜誌社

本社取次書籍

書名	一部代價	郵税
西郷隆盛傳	卷一ヨリ卷五迄五冊 壹圓三十五錢	一冊六錢宛
救急看護法	三十五錢	二錢
普通看病學	三十五錢	二錢
きやうと	二冊八十錢	十錢
祝ひ歌	十錢	二錢

日本宗教大取次

哲學書院◎警醒社◎好朋館
東海堂◎女學雜誌社

女學雜誌定價表

前金	壹冊 價 金拾錢 一年 前金 金壹圓 (無郵税)
廣告料	一行一回 前金十錢 (廿七字詰) 同三回以上 一割引 同六回以上 二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道徳なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年七月廿四日印刷
明治廿八年七月廿五日發行

東京市麹町區下六番町六番地
發行兼編輯者 巖本善治

東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地
印刷者 根岸高光

東京市麹町區下六番町六番地
發行所 女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場 (電話十九番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

女學雜誌社出版書籍

書名	著者	一部代金	郵税
(再版)小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵税八錢
(六版)百人一首講義	鈴木弘恭君講	同廿五錢	同四錢
(信神孝父)腓立比物語	櫻井成明君譯	同廿八錢	同六錢
(猫さき)猫と鼠	女學雜誌社編	同四錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治君著	同八錢	同
木村鐙子小傳	前	同八錢	同
公娼可滅	前	同三錢	同
教育講義	前	同七錢	同
日本女學	前	同四錢	同
(再版)文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十二錢	同四錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同八錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同十二錢	同四錢
俳諧史傳	小此木信一郎 布川孫市 兩君同著	同廿七錢	同
善惡の岐	中島とし子著	同十七錢	同
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同三錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同四錢	同
兒育草	同	同十二錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同二錢	同
戲曲桂吾郎	阿波鳴門左衛門著	同十錢	同
高橋傳五郎	巖本善治君編輯	同五錢	同
偉人物	山月子稿	同二錢	同

發行所　女學雜誌社

本社取次書籍

書名	一部代價	郵税
西鄉隆盛傳	卷一ヨリ卷五迄五冊 壹冊三十五錢	一冊六錢宛
救急看護法	三十五錢	二錢
普通看病學	三十五錢	二錢
きやうと	二冊八十錢	十錢
祝ひ歌	十錢	二錢

日本宗教大取次

哲學書院◎警醒社◎好朋館◎東海堂◎女學雜誌社

女學雜誌定價表

前金	壹冊定價 金拾錢 一年前金 金壹圓 （無郵稅）
廣告料	一行一回 前金十錢 （廿七字詰） 同三回以上 一割引 同六回以上 二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年七月廿四日印刷
明治廿八年七月廿五日發行

發行兼編輯者　巖本善治　東京市麹町區下六番町六番地
印刷者　根岸高光　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地
發行所　女學雜誌社　東京市麹町區下六番町六番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　（電話十九番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY